
カギアナ

鶴田 創要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カギアナ

【Nコード】

N8918T

【作者名】

鶴田 創要

【あらすじ】

閉じ込められたその男は、一体誰なのか？

白く固いコンクリートの壁で覆われた空間、何も思い出せない男、カギアナ（鍵穴）から見える光景は驚愕の事実だった。

第1章 白箱（前書き）

箱の中の男

第1章 白 箱

俺はいつからここにいるのか、、、。

そもそもここはどこなのか、、、。

そして、自分の名すら思い出せない俺は、いったい何者なのか、、、。

ぼんやりとした意識の中、俺は思考を巡らせる。しかし、手掛かりすら掴めない。

そのうえ、うつぶせの状態が目覚めた俺の体は鉛のように重く、手も足もまったく動かすことができない。だが、視界だけはかろうじて自由が利く。目玉を右から左へ、左から右へと、ゆっくりと動かしてみた。面という面すべてが白く塗装された空間。そして体の前面に感じるザラついた硬さが、白さの奥にコンクリートが控えていると伝えてくる。どこにも出口はない。消耗した蛍光灯のまたたきのもとで、俺の頭の中はこの空間同様真っ白だった。

「うつ……あつ……」

長い間声を出していなかったのか、声帯に痺れるような違和感を覚える。だが、俺の存在を外界に知らせるには声を用いるしかない。俺は精一杯顎をひねりながら声を絞り出した。

「だ、、誰か、、い、、いないか、、」

擦れた俺の声が空間に虚しく反響し、得られることのない問いを発する。

「お、、俺は、、だ、誰なんだ、、？」

もちろん答えなど返ってこない。

どれくらい時間がたっただろうか。唐突に体が痙攣し、俺は体に自由が戻ったことを知る。ゆっくりと上体を起こし、四つん這いになって壁際まで移動した。ようやくのことで背中をコンクリート壁にあずけた俺は、自分の両手で顔面のパーツ一つ一つを確かめるように触れてみる。額から上頭部まで走る縫い痕のような気味の悪い感触に、俺は手を止めて考え込んだ。

（な、なんだ、、気持ち悪い、、俺、の顔なのか、、？）

思考を様々に巡らせてみたところで、答えが得られるわけもなかった。俺の頭の中は依然として真っ白だった。再びパニックに陥りそうになった俺は、ゆっくりと、壁伝いに立ち上がった。白い壁面に額を押し当て、頭の中の記憶の糸をたどる。

俺が目覚める前の記憶、、。

どれだけその糸を辿ってみても、行き着く先には崖があり、覗きこむと真っ暗な闇が広がっているようだった。

じっとしている事自体に恐怖を感じ始め、俺の膝は小刻みに震え始めた。震える膝を、一步一步踏み出してその恐怖を紛らわせる。壁面に手を添えながら、この閉ざされた空間の細部一つ一つを確か

めるようにして、ゆっくりと歩き始めた。

狭い空間の壁面沿いを既に何周も回り続けていた。檻の中に捕えられた落ち着きのない哺乳類のように。グルグルとあてもなく、回り続ける。

俺の頭の中は、不安と絶望と疑問が混ざり合い、化学反応を起こして今にも爆発しそうな状態だった。

突如、俺の空っぱの胃を誰かに握りつぶされたような感触がしたと同時に、酸っぱい液体が喉元から白い壁面に向かって吹き出した。

肩で息をつきながら、ヌルヌルとした液体が垂れ流れる壁面に頬を擦りつけるようにして、俺はそのまま崩れるように倒れ込み、意識を失った。

何時間、いや何日、、？経過したのだろう。既に時間の概念は俺の中でなくなっていた。いくら考えたところで、俺の頭の中には相変わらず果てしなく水平に続く崖が広がっているだけだった。そして、その先には一歩たりとも進めない。俺は、薄暗いこの空間の中央に仰向けに寝転がり、考えるのを止めた。

というより、何も考えたくなかった。

第2章 事故（前書き）

逃げる負傷した男、死んだ女

第2章 事 故

俺は、割れたガラスの隙間から建物の外へ飛び出した。

その瞬間に、車から降りてきた数名の男達が、俺をめがけて銃を構える。

パンッパンッパンパンッ。

乾いた銃声が響き渡る。

俺の腹部に激痛が走り、思わず前のめりになり、バランスを崩した。

ブチャッ！

肉と肉がぶつかり合う鈍い音が響き渡る。

気が付くと俺は、血まみれで、うつ伏せに倒れている女の、真上に倒れていた。

「クソッ、、、よりによって、、、こんなところで、なんで、、、この女は此処で倒れてんだ、、、？」

邪魔くせえ女だ、、、」

確か、、、俺が撃った女、、、？

つい先程の記憶でさえ曖昧になっていた。

女は叫びながら出口へ向かって逃げ出した。

イラついていた俺は持っていた銃を躊躇なく女の背中めがけてぶつ放した。女の体が吹き飛んでガラスにめり込んでいくと同時に波紋を描きながらガラスが砕け散る。

俺はその血まみれの女の上で、先ほどの光景を、まるでアクション映画でも見ていたかのように思い出していた。

腹が、ズキズキと痛み出した。

火鉢に入れていた鉄の棒を突き刺されたような、今までに味わったことのないこの痛みは、夢見心地だった俺を一瞬で現実へと引きずり戻した。

「痛え、、、。痛えよ、、、。撃たれたのか、、、？俺、、、」

女の真上に倒れた状態で、片方に握っていた銃をとにかく奴らへ向けてぶつ放した。

ドンツ、、、ドンツドンツ、、、。

奴らは自分達が乗り付けていた車の陰へ頭を引っ込め、こちらの様子を窺っていた。

車の陰から銃口をこちらへ向けている奴らのうち一人が言った。

「さあ、銃をそこに置けっ。もう包囲されてるんだぞ、、、見てみるっ。」

「うるせえ、、、近寄るな、、、少しでも近づいたら、ぶつ放すぞ、、、。」

そう言い放った俺は、心底怯えていた、、、。

頼む、、消えてくれ、、何もかも消えてくれ、、俺自身も消えてなくなれつ、、。

うつ伏せに倒れていた女の首元には大きなガラスが突き刺さっていた。

突き刺さったガラスの根元から大量の血が、俺の鼓動に合わせるかのように、顔面にめがけて噴き出す。

プシュッ、、、、プシュッ、、、、

俺は血の噴水の隙間から、後、数メートルの所にある黒い車を見つめていた。

腹の激痛からか、奴らの声が遠くに聞こえ始めていた。後、数メートル、、車までの距離が、遥か彼方に感じる、、。

あと少し、、あと少しなんだから、、放っておいてくれよ、、頼むから、、。

俺は願いながら、ゆっくりと、イグアナが憑依したかのようなポーズで、少しずつ前へと進む。下を覗き込むと俺の腹からはボタバタと血が滴り落ちていた。

奴らは容赦なく俺に向けて、たて続けに発砲する。

バンバンッパンッ

俺の目の前の地面のアスファルトがチュンと音を立てて弾け飛んだ

かと思った瞬間、耳元にキュンという、弾がかすめる音がした。

「動くな！」

俺は恐怖でそのイグアナ状態から前にも後ろにも動けなくなっていた。

当たる、、、間違いなく当たる、、、。俺の今までの人生を顧みると、ここで俺に弾が当たらないはずがない、、、。

車のドアノブまで、後2メートル弱、、、。俺の真下には首から血を噴いて横たわる女。

次の瞬間、

俺の体は無意識に動いていた、、、。

突如地球上の重力が半分になったかのように、やけに体が軽く感じた。

「神が降りる」とはこういう事なんだろうと思える程だった、、、。正確には神ではなく悪魔が降りるというべきだろうか、、、。

俺は、うつ伏せに倒れている女の首元に刺さったガラスを乱雑に抜き取り、その女を掴み上げて立ち上がった。そして、その女を、奴らから見て正面に抱えて、女の頭に俺の手に持っている銃を突きつけて奴らに向かって怒鳴り上げた。

「お前ら、この女がどうなってもいいのかっ！」

この女、、、明らかに死んでないか、、、？

自分が叫んだ言葉に疑問を抱きつつも、俺はとにかく夢中に行動を起こしていた。腹の痛みも忘れてしまう程に無我夢中だった。幸いな事に、その女の目は半開きで宙を見つめている状態。銃を構えている奴らに少し動揺が走るのが分かった。そして、小声で何か言い合っている。

やった、、やった、、神様、、じゃなくて、悪魔様、ありがとう。

小躍りしたい気分だった。

自分のこの気持ちを悟られないように、神妙に眉間に皺をよせて、、うまくやりきらなくては、、。

その女を引きずるようにして俺は車へとゆっくり歩いた。ドアを開け、まず片方の手に持っていた血の付いた袋を助手席へ投げつけ、血まみれの女を後方席に放り込む。そして、奴らに向けて残っていた弾全てを撃ち込んだ。

ドンッ、、ドンッドンッ、、ドンッ、カチンッ、カチンッ、、

奴らは車に体全体を隠すようにして引っ込んだ。無線で連絡を取りあっているように見えた。

俺は頭を低くして、瞬時に運転席へ乗り込んだ。

「ざまーみろっ。俺は、神だっ、、誰にも俺は捕まえられねーんだよ、クククッ、、。」

鼻歌交じりで付けてあった鍵を回す。

キュキュッ、、、キュッ、、、キュルキュルッ、、、。

エンジンが掛かりそうもない寂しい音を立てる。

「う、、、、、嘘っ、、、。」

（プププッ、、、）

後部座席で血まみれで白目をむいている女に笑われたように思えて、俺は、その女の亡骸を睨みつけて叫んだ。

「黙って死んでろっ！」

バンバンッバンッ、、、バンバンッバンッ、、、

物凄い銃声が立て続けに鳴り響く。同時に、乗り込んだ車のガラスが弾け飛び、その破片が俺の頭の上へ碎け散って降ってくる。

「ウワオーーーーー！ちくしょー。」

ガラスが碎け散った音で、激しい耳なりがしていた。撃たれた腹の痛みが、怒涛のように迫りくる。

「ウツ痛え、、、。ま、、まじかよ、、、。」

もう一度、鍵を回してみる。

キュキュッ、、、キュッ、、、キュルキュルッ、、、。

先ほどとほぼ同じ音だった。

奴らの声、足音が序々に大きくなってくる。

「おい、車から降りろっ！」

「A班、包囲しろっ！包囲しろっ！前に回り込め」

銃を構えた数人がゆつくりとこの車へ近づいてくるのがミラー越しに見える。

「な、、、な、、、なんでっ、、、クソクソクソッ来るな来るな来るな来るな、、、」

「ちくしょー！ー！ボロ車がっ！」

力一杯俺の両手と額をハンドルに打ちつけた、、、。

ドンッ！！！！

一瞬だが乗っていた車が前方へ向かって動いた感覚がした。

ゆつくりと、、、ではあったが、車は重力に逆らうことなく前方に動き始めた。

僅かだが俺が駐車していた地面が前方へ向かって傾斜している事に気づいた。俺は前屈みになったままクラッチを踏み込んでギアを1速に入れて、機を待った。

「もう少しだけ、、、あと1メートルでいいんだ、、、。」

俺は祈るような気持ちで呟いていた、、、。

奴らが叫びながら近づいてくる足音が更に大きくなってくる。

「おいつ動いてるぞ！押さえろっ！」

今だっ、、、頼む、、。

俺は祈った、、、そして目一杯に押さえていた左足を突き離れた。

ガタンッガッガッ、、、

グオーン

同時に物凄いエンジン音が辺り一体に鳴り響いた。

「やった、、、」

右足を、車から突き抜ける程にアクセルを踏み込んだ。

キキツキキキーー！

前輪が煙を上げてスピンをした後、猛烈な力が俺をシートに押し付ける。そして、タイヤが焦げる嫌な匂いが、一瞬で車内一杯に広がった。

その直後に、奴らが一斉に射撃を始めた。

パンパンッパンパンパンパンッ、、、。

車に弾が当たる音、ガラスが割れる音、周辺のポールへ当たる音、様々な音が、俺の耳の中に反響して、物凄い耳鳴りが始まった。

「ウウウワァ、、、、。」

衝撃音を掻き消そうとするように俺は叫び、更にアクセルを踏み込む右足に力を入れた。

腹の痛みが俺の全身を覆い尽くそうとしているようだった。
片方の手で腹を押さえながら考えていた。

これからどうしようか、どこにいこうか、、、。とにかく、逃げなければ、、、薬もいる、、、。

（逃げたって無駄でしょ、、、この薬中、、、）

後部座席の女が、馬鹿にしたような物言いで呟いたように感じた。

「う、、、嘘だろ、、、。」

俺は生唾を飲み込み、ゆつくりとバックミラーを片手で調整し女を確認した。

そこには、放り込んだままの状態で、女が白目を剥いて横たわっていた。

俺はほっと胸を撫で下ろした。

（な、、、なんなんだよ、、、。俺の頭がおかしくなってきたのか、、、？単なる幻聴なのか、、、？）

バックミラーで後ろの女が動いていないかを時折確認しながら、どれ位車を走らせただろうか、、、。腹の痛みは極限まで来ていた。出血はひどく、ハンドルを握る手は小刻みに震えていた。

そして、意識は朦朧としていた。

「ちくしょー、痛え、、、痛えんだよっ、、、。」

俺は猛スピードで運転する車内で叫んでいた。シャツを乱雑に捲り上げると、まるで山頂にある噴火口のように皮膚が丸く盛り上がった。

ていた。そこからマグマのようにドロドロとした赤い血液が滲み出す。

額から吹き出る汗を真つ赤な血で染まった手で拭き取ろうとするが、額には血を指でなぞった異様な模様と汗が混じり合い、バクミラーに映り込む俺の顔は鬼のような形相になっていた。

俺は異常な程の猫背で、片方の手はハンドルを握り、片方の手は血で染まった腹部を鷲づかみで抑えていた。

助手席には、血のついた袋が乱暴に置かれ、その足元には、銃が無造作に転がっている。袋に開いた大きな穴から、車が揺れる度に血に染まった一万円札がこぼれ落ちる。

視点の定まらない虚ろな目つきで、肩で息をしていた。そして、何だか全てが可笑しく、馬鹿らしく思えてきた。

「俺、、何やってんだ、、？なあ、、俺疲れたから少し運転代わってくれないか、、、、腹も痛えしよ、、クククク、、」

後ろに横たわる女の死体に話しかけるように呟いていた。

そして、大声で笑い始めていた。

「ククツ、、、パハツハハハハ」

大笑いすると腹筋を使うせいか、まるで最初に井戸を掘りあてた時に地上に噴き出してくる泥水のように腹からどす黒い血が噴き出した。

それがまた余計に可笑しくて笑いを止めることが出来なかった。腹筋を使わないように甲高い声で笑った。

「ヒヒツ、キャキャツ、ヒヒヒツ」

ひび割れたフロントガラスの向こうでは、夕日が沈みかけた空が今までに見た事がない位に、紫色に見えた。片方の手で自分の目を擦ると一瞬オレンジ色の空になるが、一時するとまた紫色の空へと変化していく。

汗に血が混じった赤紫色の液体が目に入って、オレンジ色の空を紫色に見せているだけであることに気付くのに、さほど時間はかからなかった。

その独特なオレンジ紫色の空に吸い込まれるような感覚になり始めた頃、街灯の明かり、住宅の表札の明かり、全ての点光がシャッタースピードを遅らせて撮った写真のように線光へと変わっていく。どこまでも続いて伸びていく様々な線光が、俺の視界に万華鏡のような模様を作っていく。

物凄いスピードで走っていた車が一瞬にしてスローモーションのようになんて思えた。

（やべっ！エンジン、、止まったのかっ？）

虚ろな目でスピードメータを確認すると、ゆうに100キロを超えているのをみて、安堵する。

（このまま、、このオレンジ紫色の空へ吸い込まれてしまいたい、、。）

このオレンジ紫色が俺という存在自体を溶かして、消してしまい、そして、また何もなかったかのように夜が始まってくれればどんなに幸せだろう、、。

バックミラーを覗くと遙か後ろに、赤い無数の光が見え始めた。それを見て、子供の時に麻疹はしかになった時の事を思い出してゾツとした。

痒くて洋服をたくしあげると体全体に現れた赤い点々が気持ち悪くて、消してしまいたい一心で掻き毟った。

俺の記憶の中の赤い点の一つ一つから垂れてくる赤い血の筋が、まるで俺の脳みその中のシワの隙間に入り込んでいくような不思議な感覚だった。腹の痛みがまたズキンツと俺を突き上げる。

その瞬間さっきまでのスローモーションで幻想的な世界から、両足をサメの口に挟まれて汚い海の底へ引きずり込まれるような感覚で、全ての情景が現実のモノへと変わっていく。

「くそつ、くそつ、くそつ！なんでっ、なんでなんでっ！」

ふと気付くと、真っ直ぐに進む道の、ずっと先の歩道でキャッチボールをしている親子の姿がうつすらとひび割れたフロントガラス越しに見えた。

それが、現実のものなのかどうかは、今の俺には判断出来る状態ではなかった。見えるというよりは感じていたのかも知れない。どこか懐かしくて、今まで感じていた恐怖は一瞬で吹き飛んだ。

「父さん、今のボール曲った？カーブの投げ方これで合ってるよね？」

声なんて聞こえてくるわけがないのは分かっていたが、あまりにもリアルすぎる声にハッと息を飲んだ。さっきまであんなに遠くにいた親子が今は手を伸ばせば届きそうな距離までに車は迫っていた。

「父さん、さあ、投げていいよ、」

自分の口から自然に言葉が出ていた。まるで自分がその場にいるような不思議な感覚だった。

父親の投げたボールがこちらへ飛んでくるのがスローモーションで見えた。自分の真赤に染まった片方の手をフロントガラスへ向けて大きく開いた。

次の瞬間、車道へ飛び出してきた少年の恐怖におののく表情が、俺の目の前にあった。

口は半開きで、命ごいする少年の視線はまるで俺の眼球の黒い部分を突き破って、後頭部の頭蓋骨の内側の橢円部分に衝突したように感じた。

ガラスのコップがテーブルから落ちて砕け散り、辺り一面に飛び散っていくように、俺の後頭部に衝突した少年の視線は砕け散って俺の体全体に内側から突き刺さっていく。

俺は無意識に力一杯ハンドルを少年から反対の方向に切った。

物凄い衝突音が鳴り響き、とてつもなく強い奴が、暗闇の中で俺を踏みつけたようだった。

（確か子供の頃にオヤジに買って貰ったソフトビニール製のあの怪物、奴が俺をやっつけようとしているんだな、、、。）

（早くこの攻撃を止めてくれ、、、もうお前が最強なのは分かったよ、、、。）

（サイレンの音、人の声、悲鳴、俺の頭の中で聞こえているのか、、、？実際に聞こえているのか、、、？そもそも俺は死んだ、はず、、、？）

（これは地獄の鬼達の声なのか、、、？）

とにかく全て終わったという安堵感で俺の心は比較的穏やかだった。

直ぐに自分の体が自分の体でなくなるような心地よい感覚が生まれ始めた。

（ヘビが脱皮する時はこんな感じなんだろうな、、、。）

自分が着ているこの醜くて、重くて、臭くて、汚い肉の洋服におさらば出来ると思うと、嬉しくて自然と小躍りしたくなったが、足の小指さえ動かせない事に気が付いた。

ふいに上の方で何かが反射して光った。

何かと目があつたような気がした。

同時に若干の恐怖と好奇心が芽生え、その俺の真上にある視線の方向へ眼の玉をゆっくりと動かした。

俺は目が合つた状態のままそいつをじっくりと見てやった。

（真っ赤な顔の鬼だ、、、。）

前頭部の中心がパツクリと開き、内部から白いシワシワの脳みそがはみ出している。

（汚い鬼め、俺の体が今自由に動くならば、お前のその臭そうな割れ目に俺の中指と人差し指を突っ込んで、脳みその中心にあるオカリナのような物体に、俺のこの2本の指を引っ掛けて、ひねりながら引っ張り出してやるのに、、、。）

（いやいや待てよ、、、こいつは、、、そうだ、、、後ろで寝転がって死んだふりをしていたあの女だな、、、醜い女め、、、。やはり生きてやがったか、、、小賢しいっ！ここにあるこの金が必要に欲しいのかっ、くれてやるぞ、俺にはもうそんな紙切れなど必要ない、、、。）

俺はそんなことを考えながら、精いっぱい力を振り絞り、懇親の力を口元に集中させ、血の混じった唾を吐きかけてやった。

ペッツ！

暗闇の中で、空中に噴水のように飛び出していった俺の赤黒い唾はニュートンの法則に逆らうことなく空中で一瞬止まった後、上昇した時と同じ運動で、様々な光を反射させながら、自分に目がけて舞い戻る。

ペチャッ

という小さな音を立てて何処かに当たった。

俺の額をネバネバした液体が垂れ流れる感覚がしてゾッした。その瞬間、俺の心臓の音がバクバクと音を立て始めた。そして、血液が再び俺の体へ行き渡り始める感覚を感じながら、俺は頭の中で、掛け違えたボタンをゆっくりと掛け直していく。

ま、さ、か、、、。まさか、、、？

ゆっくりと目を凝らしてもう一度上にいる得体の知れない誰かの方へ眼の玉を動かした。

恐怖で今にも泣き出しそうな、そいつ、、、いや俺の顔がそこにあった。

「やつ、、、ぱり、やつぱり、、、こいつ、、、俺、、、？ヒビビ、

」

次の瞬間、後ろから冷たく細い女の手が俺の首にゆっくりと絡みつき、グチャグチャの車体の下へ向けて引っ張っていく。

「フフフツ、、、、」

上品な女の笑い声が聞こえたような気がした。

ろれつの回らない口調で俺は必至に叫んでいた。

「ヒヤヒヤ、、、、ヒツヒツ、、、、やっやめれ、、、、やめれ下さい、、、、ひっ、、引っ張らないで、、、、す、、、、すみません、、、、れした、、、、もうしません、、、、。」

冷たくて血まみれのその細い手は俺の叫びに全く反応することもなく、むしろ、より一層強い力で俺を引っ張り始める。どんどんと車体の中へ埋まっていき、車体を通り越して固い地面までたどり着いた。

と、、止まれっ、、、、止めて下さい、、、、

願いも虚しく、今度は冷たくて固いアスファルトの中に埋まっていた。

息が出来なくなった、、。。

深い深い地面の中へどうすることも出来ないまま、俺は沈んでいた。

第3章 鍵 穴（前書き）

白い閉ざされた空間の中で男は何かを見つけた。

第3章 鍵 穴

どこかで風が吹き込んでくるような微かな音が聞こえてきた。この白い空間の中央で、俺はゆっくりと目を覚ました。

俺の頭の中で聞こえているのか、実際に聞こえているのか、、それを確かめるために、俺はゆっくりと立ち上がり、両手で自分の耳を少しの間塞いだ。そして、子供がウサギの真似をするように、耳に当てていた両手をゆっくりと開く。

シューーー、、、、

（聞こえる、、、、やはり、、、、聞こえる、、、、）

今この瞬間に、この白い空間のどこかで、その微かな音が、俺の頭の中ではなく、実際に、聞こえていた。

どこからその音が漏れてくるのかを見つけるために、壁面、床面に耳を目一杯に押し付け、擦りつけて、這いずり回った。

冷たいコンクリートの床面には所々凹凸があり、耳たぶが時折その凹凸に引っかかり、チクツとした痛みが走った。音の発信源を探するという作業に没頭していたせいかな、その痛みは全く気にならなかった。

どれ位の間その作業に没頭していたらどうか、、、、徐々に耳全体が熱くなり始めたため、今度は反対の耳を使おうと顔を反転させた。

その瞬間、床面には、一筆書きで描いた漢字の「川」のような文字が、どす黒い血で描かれていて俺はゾツとした。

な、、、、なんだ、、、、この字は、、、、

一瞬何がなんだか分からなかった俺はぼんやりと、その床面に描かれた模様を見つめていた。

床面に押しつけていた方の耳に、手を当てて、ゆっくりと自分の目の前に持ってきた。血まみれになっていて俺の手からポタリと血がしたたり落ちた。それをみて、初めて自分の耳から血が垂れ流れていることに気付いた。その「川」のような赤い文字があまりにも印象的で、不思議と痛みは感じなかった。むしろ、耳から流れ出る血が生々しくて、温かくて、新鮮に思えた。久々に何かから解放されたような、晴々しい気分。聞こえていた音の事もすっかり忘れ、切れてブラブラになって、今にもちぎれそうな自分の耳たぶを、俺はニヤつきながら、ずっと、触っていた。

もう少しで取れてしまいそうな俺の耳たぶ、いつそのこと思い切って取ってしまったら、いや、出血が止まらなくなってもやっかいだな、

そんな事を考えながら、俺は治りかけた傷口の瘡蓋かさぶたを触っているような、そんな心地の良い葛藤を長い間楽しんでいた。

耳たぶをどれ位の間触っていたのかは定かではないが、また例のシュツという音が聞こえるようになった。実際には、ずっとその音は聞こえていたのかもしれない、。あまりに耳たぶを触るという行為に耽っていたせいで、単にその音の存在自体を忘れていただけなのかもしれない、。

先ほど耳たぶがちぎれる程の惨事になってしまった事を思い出し、今回はなるべく耳が壁面、床面に擦らないようにした。ある位置に耳を当て、そして、次の位置に移動する際には、擦らずに耳を少し上げてから移動した。

何もないこの空間では、この音の有りかを探すという単調で地味な

作業でさえ、至福の時間であった。

宇宙飛行士が宇宙にゆっくりと漂いながら、与えられた任務を遂行しているような、心地よくて、使命感に溢れるような、そんな清々しい気分だった。

一度確認した場所をまた確認する必要があるように、床面、壁面に自分が耳を当てたという印を一カ所、一カ所に爪で引っ搔いてキズを付けていった。

ふと気付くと、白い空間に無数の爪の跡がまるで般若心経のように青白く浮かび上がっていた。

それを見た俺は、その不思議な模様に吸い込まれて行くような、そんな感覚がして動けなくなつた、。その場に立ちつくし、ただ、神々しいようなその模様をじっと見つめていた。そして、なぜかそれがさも当たり前であるかのように、祈り始めていた。

許されたい、。許されたい、。？

えっ、。何を許されたいんだ、。俺は？

自分がなぜ、誰から、。何から、許されたいのか分からなかつた。ただ、しきりに許されたいという気持ちが溢れ出した。自然と両手を合わせ、膝をつき、震える声でその般若心経のような模様の前で呟いていた。

「許して、。下さい、。許して、。下さい、。。」

溢れ出す涙、。なぜ、？

この涙は何に対する涙なんだろう、。？

両手を合わせたまま、膝をついて前のめりの状態で俺は必至に祈っていた。

この涙は、この許されたいという祈りは、俺の過去に何か関係があることなのか、？

この閉ざされた空間となんらかの関係があるのか、？

涙の理由、許されたいと祈る理由は、やはりいくら考えても分からなかった。しかし、いつしか理由や理屈などはどうでもよくなり、一心で祈っていた。

いいんだ、いいんだ、とにかくほんの僅かでもかまわない、俺の魂が洗われてくれれば、。。。

ほんの僅かでも構わない、他の誰かに俺を許す心が芽生えてくれれば、。。。

俺は、暗黒の底から少しずつ浮き上がっていくような神々しい気分になえなり始めた。気づかないうちに、両手を合わせたまま、ゆったりとした状態で、深い眠りにについていた。

シュッ、、、、。

遠くでまたあの音が聞こえ始めた、、。

意識がゆっくりと戻っていった。戻ってい

くにつれ、その僅かな音は、はつきりと聞こえてきた。ぼんやりとした意識の中、ゆっくりと体を起こした。目の前に青白く浮かび上がった般若心経のような模様の中に一瞬キラリと何かが光った気がした。

シュッ、、、、。

目を凝らして、耳から息を吸い込むように、意識をその音に集中させた。キラリと光ったように思えた場所からその空気が漏れるような微かな音は聞こえていた。

穴、、、？何かの穴、、、なのか？

俺はゆっくりとその穴に近づいた。そして、様々な角度からその穴を凝視した。

どうやら鍵穴のようだった。

夢中で耳を押し当てると、微かではあるが別の世界の空気が、シューッという僅かな音を立てながら、俺の耳の奥の方へ入っていった。バチッ、ジッジー、バチッという音がその漏れてくる空気に混ざり合っていた。接触不良で点いたり消えたりする蛍光灯が出す音に似ていた。

鍵穴から漏れてくる空気を指一本一本に押し当てて、それぞれの感触を無我夢中で味わった。

この白くて、薄暗い空間以外にも別の世界が存在していた事に対する驚き、好奇心、同時に感じる不安を味わいながらぼんやりとその鍵穴を見つめていた。

ふいにその鍵穴から光が漏れ始めた。

自分の目がおかしくなったのではないかと不安になり、両手で顔を洗うように目を激しく擦った。そして、ゆっくりと目を開けるとその光の中を黒い影が右に、左に、、、行ったり、来たりし始めた。先に感じていた感情が俺の頭の中でどんどん肥大していった。孤立無援のこの世界から解放されるという安堵、、、反面、自分一人

の世界が破壊されてしまうのではないかという不安、、、。止まっていた思考が突如として、走り始めた。脳みそのしわの隙間に久しぶりに血液が浸み渡っていくようなゾワゾワとした感覚がした。首筋にある太い血管の中を血液が上へ上へと上がっていくのが分かり、両方の首元に自分の両手を当てて激しく擦った。そして、その光を見つめながら俺は戸惑っていた。

何だ、、、何なんだ、、、何かいるのか？何か動いている、、、

その影が動くのを、鍵穴の前ですつと見ていたが、実際に覗いてみたいという衝動が次第に湧いてくる。

何がいるんだ、、、？覗いてやる、、、覗きみてやる、、、そこにいる奴を、、、。

両膝をついて、少しずつ顔を近づけていく途中、その鍵穴から針が飛び出して自分の目に突き刺さるイメージが頭の中を駆け巡り、瞼がピクピクと痙攣した。

怖い、、、でも、、、覗きたい、、、でも、、、何かとんでもない事が起こりそうな予感、、、でも、覗き見てやりたい、この鍵穴の向こうを、、、。

結局覗きたいという衝動には勝てず、思い切って一気に鍵穴を覗きこんだ、、、。自分のまつ毛が鍵穴の周りの壁面に触れて、目がむずがゆくなるのを感じた。ピクッピクッと俺の瞼は痙攣していた。俺は、覗きこんだまま待った、、、何かが起こるのを待った。

実際に鍵穴を通した向こうの世界が自分の眼球の黒い部分に映り込み、その画像が分解されて視神経を通って脳に浸み渡る。そこでまた画像がゆっくり組みあがっていく。ゴクリと唾を飲み込みながら、

脳の奥で組みあがっていくその映像を待ちわびた。

長い廊下が見えた、、、。

とてつもなく長い廊下に思えた。

はるか遠くの方で黒い服を着た誰かが、右から左へ通り過ぎていく影が見えた。

今度は左から、右へ、、、。

咄嗟に呼びかけようと思ったが、どうやって声をかけるべきなのかわからず、とにかく腹に力を込めて目一杯に叫んでみた。

「ウツ、ウウ〜。」

自分の声が鍵穴の下の壁面に反響して自分の耳へ突然飛び込んできた。同時にキーンという猛烈な耳鳴りが始まり、脳天にカミナリが落ちたような感覚がした。俺は堪らずその場にしゃがみ込んで頭を思いつき掻き毟った。

耳鳴りは永遠と思える程に鳴り止まなかった、、、。意識が遠のいていく。崩れるように頭を押さえこんで倒れ込んだ。

うつすらとした意識の中、ふと人の気配を感じた、、、。誰か、、、いる。その鍵穴から俺を覗きこんでいる、、、。

鍵穴の向こうから声が聞こえたように感じた。治まりそうもない耳鳴りに堪えながら俺はその鍵穴に意識を集中させた。

「クククツ、、、キヤキヤ、、、」

やはり、聞こえてくる、、、ここで動けないでいる俺を馬鹿にした

ような子供の笑い声、、、。

「誰だっ、、、クソガキっ、、、」

俺は痛みを堪えながらも懸命に声を絞り出した。

「フシューッ、、、クククク、、、フシューッ、、、」

そいつが鍵穴に向かって向こう側から息を吹き込んでくるような音が聞こえた。その度に俺の耳元へ空気が吹きかかっているように思え、耳なりが一層ひどくなっていく。

「く、、、く、、、くおー、、、止める、、、クソガキ!」

「キヤヤヤハハハ、、、」

更に甲高い声で子供が笑った。刹那に電光石火のごとく、俺の頭に稲妻が走り、俺は意識を失った。

目が覚めた俺はゆっくりと上半身を起こして、耳なりが止んでいるのを確認した。そして、飛び付くようにして鍵穴を覗きこんで叫んだ。

「コラー、出て来いクソガキッ!」

「・・・・・・・・」

鍵穴の向こうは真っ黒で、単なる真っ暗な「無」が広がっていた。

拍子抜けした俺は、鍵穴に向かって俺の息を吹きかけてみた。

「シューッ、、、シュッシュッ、、、」

「・・・・・・・・」

「どうだ、このクソガキが、、、、」

「・・・・・・・・」

「シュツシュツ、、、、」

「・・・・・・・・」

何の反応もない、、。

また、鍵穴を覗きこんだ。

何も起こらない、、。

微塵も変わらない「無」の世界。息を吹きかけては鍵穴を覗き見る、吹きかける角度を少し変えてみたり、そつと吹きかけてみたりと、そういった試みを何回も何回も繰り返し返しては考え耽った。いくら考えても、決して答えは出てこなかったが、、。終には考え疲れて、頭が朦朧^{もろもろ}としてきた。

俺は何も見えない鍵穴をずっと、、ずっと覗いていた。

「ど、、ど、、ど、、いきやがった、、。」

俺は泣き声で呟いた、、。

「・・・・・・・・」

「だ、誰でもいい、出てきやがれ、」

「・・・・・・・・」

男の頬に一筋の涙が流れる。男の頬を伝って顎先で大粒の水の塊となり、重力に逆らえず顎先から落ちていく。男の真上にある蛍光灯の点滅に合わせるように、その涙の粒はキラリと輝きを放ちながら、白い床面へと落ちていった。

第4章 父親（前書き）

少年時代の切ない男の思い出。

第4章 父親

物心ついた頃には、僕に母親はいなかった。幼い頃から父さんと二人で過ごしてきた。学校の先生は母親のいない僕を憐れみの表情で見つめ、優しくしてくれた。

何か困った事がある度に、僕は「母さん、」と言って涙を流しておいた。そうすれば、万事解決という感じだったからだ。

母親の記憶さえないのだから、実際「母親」というものに対して、何の感情も湧いてこなかった。

よくテレビでやっているような「母親に会いたい、」的な番組の何が悲しいのかさえよく分からなかった。全く見ず知らずの小汚いおばさんに、涙を流しながら「母さん、」会いたかった、。

「なんて僕には絶対言えないし、抱き合って背中を擦り合う事なんて1000%出来ない」と確信する。

同時に一生「母さん」という存在がいなければいいとさえ思っていた。世間は母親がいらないというだけで僕にやさしくしてくれていたのだから、。

もしも母親が戻ってきたなんて事になってしまえば、何かあった時に、いつもの手が使えなくなってしまうのではないか、。

僕には友達と呼べる友達は、一人としていなかった。作ろうとも思わなかったし、そもそも必要であると思えなかった。僕がもっと小さな時にそんな孤立した僕を心配してくれた父さんが、僕をボーイスカウトに入隊させた。

そこは僕にとっては地獄でしかなかった。つまらないイモ掘りや、大嫌いな力ヌーにキャンプに、考えただけでも身の毛もよだつ程僕にとって忌々しい思い出だった。大人達は新しく入隊した僕をい

つでも見張っていた。僕の表情を伺い、楽しそうなフリをしていないと直ぐに呼び出されてしまう。

「どうしたの？お友達となにかあったの？」

どうしたもこうしたも、イモ掘りや、カヌーなど、面白くもない事を、面白いフリをして、楽しそうにしないではいけない事自体が僕にとっては地獄だった。

しかし、父さんに言い付けられでもしたら悲しませてしまうと思い、とりあえず適当な嘘を付いておいた。

「何だか、、、お腹が痛くて、、、。」

「あら、どうして黙ってたの？」

「あのー、、、皆に心配かけなくなかったの、、、せつかくの楽しい、お芋掘りや、カヌーが大なしになってしまうと思ったし、、、。」

「まあ、、、優しいのね、、、。」

「せつかくたくさんお友達が出来たから、、、みんなの事、、、大好きだし、、、。」

そう言いながらも、次回はどんな言い訳を言うべきかと必死で試行錯誤していた。

とにかく、何か理由を考えて、この退屈なボーイスカウトから脱退しなくては、、、。

そう、父さんを悲しませずに、いわんや納得してくれるような理由で、、、。

ボーイスカウトでは、イモ掘りが延々と続く。僕はなぜ大人達も混じって、皆が必至になって、延々とイモ掘りを続けていられるのか
が不思議だった。隣で掘っている子供もなぜか一心不乱だった。よ
ほどイモ好きな子なんだろうと思う他なかった、、、。こんなイモ
掘りなんてやめて、誰か人間をこの臭い土の中に埋めてやる方が僕
にとってはよっぽど魅力的だった。

隣で一心不乱に掘っていた子の穴がすっぽりその子を飲み込める程
の大きさになっていた。

この子は深く掘れば、大きなイモがあるとでも思っているのだろう
か？

その穴に、その子は自分の両手と頭を突っ込み、更に大きく、深い
穴を掘ろうとしているようだった。あまりにも滑稽なその子の姿を
見て、僕の中の悪い虫がそっと僕に耳打ちをしてきた。

さあ、、、そいつのお尻をそっと押してあげなさい、、、。そして、
直ぐに一杯の土を入れて
あげれば、誰にもばれずにその子をこの土の中に閉じ込めてあげれ
るよ、、、。

。ソワソワと僕に忍び寄ってくる誘惑、、、。耐えらそうもない、、、。

次の瞬間、僕は無意識にその子のお尻を力一杯に押していた。

「わっ！わっ！」

その子はずっぽりと頭からその穴に墜落して、両足の膝から上だけをバタつかせて泣きわめいた。

その瞬間少し離れた場所に居た大人達が蜂の巣をつつついたように飛んでくるのが見えた。

こっこいつ、、あんなに大きな声をあげやがって、ずる賢い奴だつ、、。せつかくこの土の

中にお前を埋めてあげるとこだったのに、、。

咄嗟に身の危険を感じた僕は、その子の両足を手に取り、助け出すふりを始めた。

ふくらはぎの柔らかい部分に僕の少し延びた爪を思いっきり突き立てて、精一杯の力で握りしめた。そして、出来るだけ目立たないように、片足で土を穴に押し込んだ。

「ブファツ、痛いっ！痛いよ。」

穴の奥底から聞こえる悲痛な叫び声。

「大丈夫っ！直ぐに持ち上げてあげるからねっ！」

走ってきている大人達に十分聞こえるように僕は声を張り上げた。そして、少し引っ張り上げたところで手が滑ったように見せかけてまた落とした。

穴の中でガツツという清々しい音が聞こえてきた。

大人達が来るまでもう一回は落とせるか、、。

僕はそんな思考を巡らせながら、込み上げてくる笑いを必至で押し殺していた。

間抜けに穴から飛び出した足をバタつかせているこの子の格好を写真に撮って、ボイススカウトのホームページにでもアップさせて世界中の人々にみて欲しかった。

大人達は血相を変えてその子をあつという間に穴から引きずり出してしまった。

その子は顔が泥まみれになり、額がずりむけて顔面に血が垂れ流れていた。そして、ぼんやりとした目つきから突如、泣き始めた。

クククツ、、なんて顔してんだよ、、この子、まるでスイカに噛り付いた後のカブトムシみたいじゃないか、、キャキャ、、。

僕は清々しい気分でその子を見つめていた。

大人達が僕に疑いの目を向けないように、そして、僕の奥底からこみ上げてくる厭らしい笑いが微塵たりとも表情に現れないように、僕はウソ泣きを始めた。そして、その子に、僕が押したの言いつけられても大丈夫なように、訴えておいた。

「ウェーッ、、、ぼ、ぼくの、、体が当たっちゃたのかも知れない、、。僕のせいだ、、。」

涙が出ていないのがばれないように、その場にしゃがみ込んで、きちんと顔は隠しておいた。

この日初めてボイススカウトに入って楽しいと思えた。しかし、これ以上この茶番劇に付き合っていく気にもなれず、迎えに来てくれた父さんに言った。

「父さん、、僕、怖いよ、、。今日、隣の子が穴に落ちて死にかけたんだよ、、。もう、ボ

ーイスカウトには行きたくないよ、、。」

そして、得意のウソ泣きを披露した。

「そうか、、そんな事があったのか、、お前が行きたくなければ、無理に行かなくていいんだぞ。」

小踊りしたい気持ちを精一杯抑え込んで、神妙に頷いてみせた。

「うん、、、ごめんね、父さん、、。」

僕は、父さんが大好きだった。

僕の父さんは毎晩遅くまで働いていたため、ほとんど会う機会もなかったが、僕にとっては特別すぎる存在と言えるかもしれない。父さんに対する僕の気持ちは時に常軌を逸する事さえあった。

休みの日以外顔を合わせる機会はほとんどなかったが、たまに仕事が終わった時には必ずお土産を買ってきてくれた。それが僕にとってはこの世にこれ以上の幸福はないだろうと思える程だった。お土産なんてどうでも良かったが、父さんが僕だけのために何かを買ってきてくれるという行為そのものが僕を異常に興奮させた。

毎晩ベッドに入って、父さんの帰ってくる足音が聞こえる事を期待しながらベッドに入った。

今日こそは、今日こそは、父さんは早く帰ってきてくれるはずだ、、、、。

真冬でも、僕は窓を少しだけ開けてベッドに入る。そうしておけば、帰ってくる父さんの足音がちゃんと聞こえるからだ。

父さんの皮靴の踵かかとの後ろの方がアスファルトを少しだけ擦るような音、、、。暗くて、寂しい布団の中で、早く、その音が聞こえて欲しいと思っていた。

あと1分で聞こえてくる、きつと、きつと聞こえてくる。

そんな事を考えながら僕は毎晩眠りについた。

日曜の午後は、父さんとよく近所の公園にキャッチボールをしに出かけた。父さんが可愛がっているシェパードを僕が引き連れて、そして父さんはグローブとボールを持って、公園までの道のりを歩く道ですれ違う近所のおばさんは、まず犬の頭をさすり、そして、いつものように僕の頬つぺたを両手で挟みながらこう言った。

「僕ちゃん、偉いのね、こんな大きいワンちゃん連れてるの。」

僕はこのおばさんが大嫌いだった。興奮気味に僕の頬つぺたを触るこのおばさんの手は異常に臭くて、ガサガサだったからだ。

農作業で肥料を扱っているせいなのだろうが、その肥料の匂いと犬の匂いが混じり合い、なんとも言えない臭い匂いが、ずっと僕の鼻にこびりついた。すぐにでも、ドブ川に顔面を突っ込んで両手で擦りたいという衝動に駆られた。ドブ川の匂いの方がまだマシに思える程だった。

後ろから歩いてくる父さんには見えないように僕はいつもそのおばさんの手を払いのけ、

（汚い手で僕を触るなこのババアッ）

と言いたい衝動を必死で抑えた。

そして、犬のケツを僕のつま先で突きあげてそのおばさんへ向かってけし掛けた。

「あつ、ごめんね、うちのワンちゃんは乱暴だから、、、。」

「いーのいーの、、大きくて元気なワンちゃんだね。コラコラ、、。」

後ろから父さんが来て、犬の首輪を後ろから引つ張った。

「どーも、すみません、、、乱暴な犬でしてね、、。」

父さんはそのおばさんに謝って、犬の頭にゲンコツを入れる。

僕は、その犬の頭にゲンコツが当たって、ガツンツという音、そして、その犬の悲しげな、父さんに対する上目使いの眼付きを見るのが楽しくて、可笑しくて、気分が晴々とする一時であった。

僕のニヤついた顔がそのおばさんにはれないように、いつも下を向いて込み上げてくる笑いに耐えていた。

おばさんに遭遇する場所から、もう少し歩いた所で、僕達はいつも小さな橋を渡った。

橋の下にはとんでもなく汚れたドブ川が流れていた。

そのドブ川の擁壁には、どこかにつながっているらしいパイプが何本も突き出っていて、そこから毒々しいドロツとした黄土色の液体が

ドブ川へ向けて垂れ流れていた。

僕が連れているシェパードはその汚いドブ川の水を毎回必ず飲みたがり、僕が持っているリードを尋常ではない力で引っ張る。

それが僕には許せなかった。

父さんには従順な犬だが、僕の言う事は一度も聞いたことがなかった。いつかこの犬の首を切り取り、中身をくり抜いて僕が被って父さんに甘えてやるんだと、この犬の顔を見る度に妄想していた。そうすれば、父さんは僕だけの父さんになってくれる。

この犬が僕には従順でないことが父さんにバレて欲しくなかった。

そして父さんの気を引くためにも僕は一生懸命にその犬が大好きなフリをしていた。

いつものようにその運動不足の犬は少し走っただけでゼイゼイと、汚なくて異常に臭い舌を出し始め、ドブ川が近づくに連れて興奮気味にリードを引っ張り始める。

この、クソ犬、、、僕を困らせるなっ、、。

僕は父さんに見えないようにその犬の耳を引きちぎれる程につねってやった。

その犬はデカイ図体のくせに小さな子犬のようなキャンという鳴き声を出して尻尾をお尻に突っ込んだ状態で座り込んだ。そして、命乞いをするように上目使いで僕を見つめて、動かなくなった。

後ろから歩いてくる父さんにバレないように、僕は優しい目つきでその犬の頭を撫でながら言っただけだった。

「どうしたの？疲れちゃったのかい？」

父さんは座りこんだ犬の頭を撫でながら、こう言った。

「しょうがない犬だなー、運動不足なんだろうな。」

「うんきつとそうだよ、父さん。こいつはちょっと走っただけで直ぐに舌を出してゼイゼイするんだから。」

そう言つて僕は、今度はつねった反対の耳を父さんにはれないように目一杯に引つ張つてやった。

公園に着くと犬を離して、僕と父さんはキャッチボールを始める。

父さんの投げる球は速くて重かった。

そして、僕のグローブで父さんの投げる球を受け取る度に、バシンツという音と一緒に父さんの愛情が弾けて、僕の体全体に噴きかかるように思えた。

その度に僕の体全体に痺れるような感覚がして、それが気持ちよくて、嬉しくて、汚らしい笑顔が僕の顔全体に溢れる。その汚らしい笑顔が遠くにいる父さんに見えないように僕は必ずグローブで顔を隠すようにしてボールを受け止めた。

全身の力と、僕の目一杯の愛情を込めて思いっきり振りかぶり、父さん目がけて振り下ろす。

父さん、受け止めて、僕の全部を受け止めて、。。。

父さんはゆっくりとした動きで僕の球をしつかりと受け止めてくれ

る。

ずっと、ずっと僕は父さんとキャッチボールをしていたかった。このままの時間で止まって欲しいと思えた。

父さんは僕にいろんな野球の事を熱心に教えてくれた。でもカーブの投げ方やフォークの投げ方なんて僕はどうでも良かった。

ただ、一分でも一秒でも長く父さんとキャッチボールをしていたかった。そのために、僕は父さんの言っている事が分からないフリをして、時間稼ぎをした。

「父さん、、カーブの時の持ち方はこれで合ってたよね、、？」

「馬鹿だなあ、、これはフォークの持ち方だよ、、。ほら、これがカーブの持ち方だよ。」

父さんは僕が野球の事を質問する時、嬉しそうに笑顔で答えてくれた。

そんな笑顔が何度も、、何度も見たくて、僕はどうでもいいような、バカな質問ばかりを繰り返して聞いた。

辺りが暗くなり始めると僕は胸が張り裂けそうになった。キャッチボールを止めて家に帰らなくてはいけなくなるのが嫌で堪らなかった。それにあの犬をまた引っ張って帰るのかと思うと涙が出そうになった、。かといって、駄々っ子のように泣き叫んで父さんを困らせて嫌われてしまうのはもっと耐えられない。

その葛藤で僕の胸は張り裂けそうに本当に気分が悪くなった。血管

という血管がしばんで血液が僕の体に酸素を送ってくれない。グローブをはめた手が冷たくなってくる。

グローブを外したら僕の左の指全部が一緒に取れてしまうのではないかという恐怖で膝がガクガクしてしまい、その場に座り込んでしまった。

父さんが僕の方へゆっくりと歩いてくる。

大変だ、、僕が、気分が悪くなって動けなくなっている事が父さんに知られたら、困らせてしまう、、。

僕は自分の状況を父さんに悟られないように、渾身の笑顔で父さんに言った。

「父さん、僕疲れたよ、、。少し休んだらもう、帰ろうつ。」

父さんは笑顔で頷き、僕の横に座ってポケットから出したクシャクシャのタバコに火を付けて、ゆっくりと煙を吐き出した。

良かった、、父さんは僕のこの状況に気付いていないみたいだ、、。

父さんの吐き出した煙がゆったりとした風に乗って僕の周りを一回りした後、ゆっくりと空へ舞っていった。その瞬間、いつもの父さんのタバコの匂いが僕を優しく包み込んだ。そして、僕の止まっていた心臓がまた力一杯に動き始める。

全ての血管にドクドクと血が流れていくのを感じると同時に、冷たかった手がどんどんと暖かくなっていくのが分かった。

思い切ってグローブを外してみると僕の指はちゃんと5本ついていた。

安心した僕は、夕焼けで真っ赤に染まった大空に向かって、そのグローブを両手で力一杯投げてみせた。

「それっ！」

ずっと、ずっと、このまま日が暮れないで、父さんとキャッチボールが出来ますように、、、、

そんな願いを託して、グローブを放り投げた。

まるで夕暮れの赤みがかった空に、吸い込まれていくように、そのグローブは高く、高く舞い上がった。

「ほら、父さん、、、あんなに高く上がったよ、見てくれたッ？」

父さんはくわえていたタバコを地面に押し付けて、落ちてきたグローブを僕の頭に被せて立ち上がった。

父さんの口から、最後のタバコの煙が吐き出され、風に吹かれて空に舞い上がっていった。

「見てたよ。凄かったぞ、、、さあ、帰ろう。」

父さんの「帰ろう」という、切ない言葉が僕の心にこだまするように響いていた。

父さん、、、僕は、、、ほんとに帰りたくないんだよ、、、ずっと、

ずっとこのまま父さんと一緒にいたいんだよ、、、。父さんのバカバカッ、、、。

父さんの口笛でどこかで遊んでいた犬が、来なくてもいいのに嬉しそうに父さん目がけて突進してくる。父さんも嬉しそうに戻ってきた犬をひっくり返してその醜い腹をさすった。

その犬は嬉しそうな鳴き声を出して甘えた。

僕はその光景を見るのが大嫌いだった。

自分のこの犬に対する嫉妬がいつ爆発してしまうのか、ある種の恐怖を感じていた。

この犬を切り刻んで殺してしまいたいというこの感情を、抑え続けることが出来るのだろうか？

そんな不安が僕の胸に湧きあがっては消えていく。

父さんは僕だけの父さんでいて欲しかった。

こともあるうちに、この常に動物園の臭いのする太った犬が父さんの愛情を独り占めするなんてことが許されていいのだろうか？

イヤッ、、絶対に許せない、、父さんは、父さんは僕だけのものだっ！

僕はこの押し寄せる感情を抑えられなくなり、腹這いになって甘えている犬にリードを付けるフリをして首元のタルタル肉を渾身の力を込めてつねりあげてやった。

キャインツ、キャイン！

こっ、、、このバカ犬がつ、僕がつねったのが父さんにばれちゃうじゃないか、、、全くズル賢い犬だな、、、お前はっ！

父さんに怪しまれないように僕はその犬にこう言っただけだ。

「ごめんね、金具が引つかかったみたいだね、はい、もう大丈夫だからね。」

そして、臭いこいつの腹を父さんと一緒に息を止めて、目をつむって、さすってやった。

僕は家に帰ると真っ先に洗面所に駆け込んだ。手に犬の匂いがこびり付いて臭くて、臭くて耐えられなかった。大量の手洗い用の洗剤を手に塗りたくり、無心に擦り合わせた。

何回洗ってもその匂いが取れた気がしなかった。洗い過ぎて両手の指先が真っ赤に腫れ上がりジンジンと痛み始めた。きっとあの犬の復讐だと思い、また怒りが込み上げてきた。

「クソツクソツクソツ、、、」

父さんに怪しまれないようにあの犬を殺す方法を早く考えなくてはいけない。

あのクソ犬を殺して、僕は、、、懇親のウソ泣きをしてやるんだ、、、父さんは、、、僕だけのもの、、、そう、、、誰にも渡さない、、、。

第5章 投 球（前書き）

閉じ込められた空間で何が起きているのだろうか？そして、その男は何を考えているのか、。。

第5章 投 球

長い間、俺はその鍵穴を覗いていなかった。

鍵穴の中には、、自分の未来などない。俺をこの世界から救い出してくれる誰かがいるかもしれないなどと刹那に思っていた自分自身が忌々しく思えた。

俺は、空間の隅に体操座りをした状態で、あいかわらずブツブツと数字を数えていた。

「2991、2992、2993、、、、」

今は、何かを数えているというよりも、宙に浮いている埃の数でも数えているかのように単に数字を自分の口から順番に出していた。そして、その数字が白い壁に反響してまた自分の元へ返ってくる。

まるで数字の形をしたブーメランが空間に円弧を描くように綺麗な残像を残して、また元の位置に戻ってくるようだった。

別の数字を前方へよく飛ばせるように口をとがらせて投げつけるようにして発する。

前に空間を漂っていた数字と衝突して自分が想像していなかった軌道を描いて数字が動き始める。

それを繰り返していくうちに、気が付くと空間がたくさんの数字達で埋め尽くされていた。

こ、、これは、なんだ、、俺の妄想、、なのか、、？

あまりにリアルに空間に浮かび上がっている数字達に俺は若干の恐

怖を感じ、座ったままの状態の後ずさりをした。

な、なんだ、、この数字達は、、？俺の妄想、、？妄想にしてはリアル過ぎるぞ、、。この空間自体に何か仕掛けがあるのか？

もしくは俺の頭がいよいよ爆発してしまうのか、、？

現実とは思えない数字達の世界がそこにはあった。俺は恐怖を感じながらも、この現象の根本原因を知るために、この数字達の流れに沿って、身を委ねる決意をした。そして、思い切ってこの空間の中を反響している数字達だけに、意識を集中していった。

スクリーンセーバーのように空間全体が黒くなっていき、あつという間に億千万の数字達だけの世界になった。先に考えていた根本原因の解明は、いつしかどうでもよくなり、今俺の目の前にあるこの世界の中だけに没頭し、そして熱狂していた。

「俺が一番デカイ数字だぞ」とでも言わんばかりに、それぞれの数字が、我が物顔で踊り始める。その優雅な踊りを見ているうちに感じていた恐怖もすっかりなくなり、今は、ある意味で楽しい気分になっていた。

もしも一生で一度だけ願いが叶うならば、俺はこの空間で一番デカイ数字に変身して、こいつらのボスになって皆を従えて自由に大空を飛んで行きたい。そんな気持ちさえ俺の中に芽生えていた。突如数字達で埋め尽くされた空間に異質な音源が飛び込んできた。

「キャキャツ、、、キャハハ、、」

俺はその声に反応してふと我に返った、、。夢でもみていたの

か、、、？目の前は何も変わらない白い空間。数字達はどこにもいない、、、。

「キャキャッ、、、キャハハ、、、」

全身がその声に反応して痙攣のように体を震わせた。聞き覚えのある子供の声。

「だ、誰だ、、、お前かつ？こないだのクソガキかつ、、、？」

「・・・・・・・・」

停止していた俺の思考が、パソコンが立ち上がっていく際のシュンシュンという小さな音を立てて動き始めるようだった。そして、再度その音源を拾おうと全神経を耳に集中させた。

（さあ、もう一度声を出しやがれっ、、、。今度は捕まえてやるぞ、、、。）

もしも、鏡で自分の耳を確認することが出来たなら、きっと、象の垂れ下がっているシワシワの大きな耳を、目いっぱい広げて、引っ張り上げて、閉じないように杭で後ろの壁面に打ち付けているような耳になっているはずだ。

「キャハハ、、、ハハッ、、、」

やはり、あの鍵穴から聞こえる、、、。

これは俺の幻聴なのか？

俺は息を殺して、その継続的なしやしぎ声を聞いていた。その声は

次第に大きく、はつきりとした音源となっていた。

空間に反響していたその声を目で追うようにして眺めていた瞬間、ポンツという音を立てて、それらの反響していた声がつつすらと白い蒸気のようになった。俺の体は、そのポンツという音に反応してビクツと動いた。

（ウツ、、エツ、、何、、？何何何、、？）

空間の所々でポンツ、ポンツという音がし始めて、それぞれの白い蒸気は徐々に形を変化させ始めた。

ポンツポンツポンツ、、ポンツ、、。

（ま、、た、、また、、始まったのか、、？今度は 何だ、、何なんだ？）

神出鬼没に俺の目の前で繰り広げられる摩訶不思議な現象。俺は、もはやそれらの現象に身を委ねるしかなかった。いつしか、答えのないナゾナゾを解こうとはしなくなっていた。

それらの白い蒸気は、ゆっくりと小さな子供の形に変形していき、この空間を泳ぎ始めた。水泳選手のような、華麗なバタフライで。

（バ、バタフライ、、してやがる、、？なんだこりゃ、子供がバタフライ、、？子供のくせ

に華麗なバタフライ、、？バタフライキッズ、、？）

（北の海に生息しているあれにも似てるな、、そう、クリオネだ、、それにも似てるが、、

いや、やはりバタフライキッズだ、、、。どちらにしても、、何
なんだこういつらは、、

俺の妄想、、幻想、、幻覚、幻聴、、？）

目の前で起っている現象があまりに奇異で、俺は目をつむって、頭
を掻き毟った。そして、ゆっくりと目を開けてみた。バタフライキ
ッズは相変わらず楽しそうにこの空間を泳いでいた。（僕のバタフ
ライが一番綺麗でしょ）とでも言わんばかりに、競い合っているよ
うにも見えた。先の数字達ばかり、この空間自体が原因で起ってい
る現象なのか、それとも俺の脳みその絡み合った配線が原因で起っ
ている現象なのか、やはりいくら考えたところで分からなかった。

俺は、空間の片隅で体操座りをしたまま、その融通無碍なバタフラ
イキッズ達をゆっくりと目で追いかけていた。羨ましかったのかも
しれない、、。

またひとつ、またひとつと、この空間の中へ入ってきては泳ぎ始め
る。

そいつらは、小さな、小さな鍵穴から弾き出されていた。

たまに太った奴は、その鍵穴に引っ掛かって動けなくなり、後ろか
らきたやつにキャハハッと笑われながら、お尻を引っ叩かれて飛び
出してきているようだった。無理やりに飛び出してきた太めのそい
つは、少し照れくさそうに、遠慮がちにバタフライを始めた。

俺はゆっくりと、ゆっくりと立ち上がった。

俺の妄想、、幻想、、幻覚、幻聴、、もう、何でもよかった
のだが、そのバタフライキッズの主を、こないだ俺に悪戯した奴を、
確かめたかった。捕まえて懲らしめてやりたかった。「お前は

結局この世に存在しない単なる俺の狂った妄想なんだっ！」と罵ってやりたかった。

バタフライキッズ達が警戒して、声の主であるガキに言いつけたりされないように、俺はそつと、そつと鍵穴を覗いてやろうと動き始めた。俺はなるべく奴らからみて不自然にみえないように、同じように両手をゆつくりと回した。体を左右に転換させながら、、かつ上下に上半身を振り、華麗で繊細な動きを始めた。

奴らと一体化するように、俺は空中でバタフライをしながら、焦らずにひとかきつつ鍵穴へ向かって泳いだ。

そして鍵穴の前で俺は両手をゆつくりと回しながら中腰になっていた。中腰になっていく動作と並行して、うまく鍵穴が覗きこめるように、ケツを突き上げていく。

もしも他の誰かがこの空間にいて、今のこの俺の格好の悪い状態を見られていたらどうしよう、。そんな不安が俺の脳裏に浮かんだが、刹那にそのような恥じらいが、まだこのごに及んで自分自身に芽生えた事に対して、可笑しくて、同時に切なかった。

その間もバタフライキッズは俺の顔面にぶつかりながら、まだその鍵穴から飛び出してきていた。

鍵穴をゆつくりと覗き込むと、、

小さな子供、、

あいつが、、バタフライキッズ達のボス、、そして、こないだ俺に悪戯したガキか、。。

しっかりと目をつむり、たつぷりと眼球に涙が浸み込むように、眼球をグリグリと瞼の裏に擦りつけて、またゆっくりと目を開けた。

やはり間違いなく子供がいた。

なぜ、、こんな所に子供がいるんだろう、、？

大きな疑問だった、、。同時に、前に覗いた時よりも、鍵穴の向こうの世界は明らかに違っていた。奥行きや広がり、、何もかもが違っていた。この鍵穴がどこか別の世界につながっているようなそんな感覚だった。

鍵穴の前で俺は考え込んでいた、、。

鍵穴を通した向こうの世界は、やはり単に俺の妄想が創り出している世界に過ぎないのか、、？

しかし、仮にそうだとしても、なぜ俺が、何のために、どこかの子供がはしゃいでいる妄想をする必要があるのか、、？単に俺の脳みそが俺をからかって遊んでいるのか、、？

どれだけ考えてみたところで、その答えは見つかりそうもなかった。そして、俺はまた鍵穴の向こうではしゃいでいる子供に意識を集中させていった。

なにか丸いものを投げたような、、。

そして、その物体の先にはもう一つの人影があった。

大人、、、のようである、、、。
遠くで顔はよく見えなかった。

その大人は子供に向かってまたそれを投げ返した。

脳で組みあがっていく画像のスピードがようやく通常の早さになってきて、細かな状況を把握出来るようになってはいたが、一体彼らが誰なのかまでは把握出来ずにいた。

とにかく父親と子供が楽しそうにキャッチボールをしている、、、
ようだ。話の内容も聞きとれる程度に頭に入ってきたが、やはり彼らが誰で、一体なぜここでキャッチボールをしているのかはまるで分からなかった。

鍵穴を覗くことに熱中しすぎて、気が付くと意識だけが自分の後ろ側に離れ、覗いている自分の後頭部越しにその光景を見ているような錯覚に陥った。次第に自分の後頭部がどんどんと離れていくように思えてきて、ハッと我に返り、鍵穴から目を背けた。先ほどまでこの空間で華麗に泳いでいたバタフライキッズ達もいつの間にか消えていた。

そして、大きく深呼吸をしてから、今度は自分の意識がまた後ろへ行ってしまわないように後頭部を片手で押さえながら鍵穴を覗きこんだ。

鍵穴の向こうは、、、もう何もなかった。ただ暗黒が広がっていた。そして、何事もなかったかのように静かだった。

「く、、、クソッ、、、」

突然、涙が頬を伝ってこぼれ落ちた。

もっと、見ていたかった、、もつとあの世界に居たかった、、。

なぜ、、？懐かしくて、切なくて、悲しくて、

自分の中の全ての感情が湧き出してくる、、。なぜ、、？

指で涙を拭って、濡れた指を乾いた口に突っ込んで、舌の奥の方にあててみた。しよっぱい、、というよりピリツと痛みを感じてさらに涙が溢れ出た。

かからなかったエンジンがようやくかかりかけた瞬間に、アクセルを目一杯踏み込む。そして、グオオーンと地面を揺らす程の重たいエンジン音が駐車場内に鳴り響く。ちょうどそんな風に俺は泣き始めた。

そして、泣き崩れた、、。肩を震わせて泣いた、、。

顔をグチャグチャにして、駄々っ子のように、この空間にある酸素全部を吸い込んで泣いた。吸い込んだ酸素は肺を通り抜けると、直ぐに液体になって涙腺に逆流して、そこから水鉄砲のように、噴出されていくようだった。

どれ位時間が経ったのか、、相変わらずよく分からない、、。

涙と鼻水、そして小便で、膝まずいていたコンクリートの床が水浸しになっていることに気づき、思わず両手で床面の液体を拭った。

手の平では全く拭い切れない事に気づき、着ていたボロボロの衣類の袖を使って、無我夢中で擦った。

ビショビショになった裾からポタポタと水滴が落ちていくのを前屈みになって、ずっと見つめていた。

なぜ、、、？なぜ、、、あんなにも涙が出たのだろうか？

ただただ、抑えることの出来ない感情の大波に身を委ねるしかなかった。あの鍵穴の向こうに見えた情景が、俺の妄想だとしたならば、何か大きな意味があるように思えた。何か意図があつて俺にあの情景を妄想させたとは思えなかった。

もしくは、誰かが手の込んだイタズラをしていたのか、、、？でも、、、何のために、、、？

疑問が疑問を生んで、俺の頭は、どうにかなつてしまいそうに危険な状態だった。

俺は、その閉ざされた空間の中央に、ゆっくりと立ち上がり、両手を大きく振り上げて、投げ降ろしてみた。そうしていると何か懐かしくて、楽しい気分になれた。向こうでグラブを付けて俺の投げるボールを受け止めてくれる誰かを想像していた。顔はぼんやりとモザイクがかかったようなイメージしか湧いてこない。その場に立ち尽くしたまま、ずっとそのモザイクのかかった顔を見つめていた。

「父さん、、、。」

自分の呟いた言葉に一瞬心臓が握りつぶされそうになった。

「父さん、、、？」

俺にも父親と呼べる人がいるのか、、、？

何だ、、、何なんだ、、、？あれは俺の記憶なのか、、、？

だったら、俺にどうしろというんだ、？

何も出来ない、、、何も変わらない、１ミリだって変えられないじゃないか、、。こんな閉

ざされた空間で俺にどうしろというんだっ！

俺は、怒りにも似た感情を抱き、悶々としていた。

何もかもが解らなかった。そして、俺は頭の中で向こう側に立っている人物の顔にかかるモザイクを振り払おうと両手を握りしめて、子供が駄々をこねて自虐するかのように頭を叩いてみた。しかし、どうやっても、そのモザイクは消えなかった。そして、深い悲しみと疑問がまた込み上げてきて、全身の力が抜けていき、その場に座りこんでしまった。

鍵穴の中の親子がキャッチボールしているイメージが頭の中から離れなかった。

自分の頭の中を右から左へ、左から右へとずっと、白いボールが飛んでいた。

次第に、今俺の座っているこの空間の中をボールが飛んでいるような錯覚に陥っていった。

そして、そのボールが飛び交う、ちょうど真ん中に俺は座っている。ボールの軌道を追って、俺は、右を向く。

少年が嬉しそうに顔の中心にグラブを持っていき、飛んできたボールをキャッチする。

バチンツというグラブがボールに当たった音が俺の頭の中で響き渡る。

少年は大きく両手を振りかぶる。小さな少年の体は不安定で、少しよろめきながらも、思い切って腕を振り下ろす。

弱々しい山なりの軌道でボールはまた、俺の頭の上を飛んでいく。そして俺は、ボールの軌道に合わせて、今度は左に顔を向けた。

父親はそのボールをキャッチする。パスツと弱々しい音がまた俺の頭の中で響いた。

父親は軽く腕を振り上げて、ボールを投げた。力強く、真っ直ぐな軌道を描いてあっという間に俺の頭の上を越えていった。

白い空間の中央で、男は長い間妄想に耽っていた。右、左、左、右と頭を揺らし、時折ニヤニヤとした笑みを漏らしながら、ゝゝ。

第6章 誤解（前書き）

男の少年時代の思い出。

第6章 誤解

川の水面に幾何学的な模様を連続して作りながら飛び跳ねていく小石。

「スゲー、さっきの石は、5回も跳ねたよ。」

数人の少年達が集まって平べったい石を探している。一人の少年が川の向こう側を指して興奮気味に叫んだ。

「でかつ、み、見てよ、あのカエルっ！」

サッカーボール位はありそうなガマガエルが向こう岸で、まるで少年達を威嚇しているかのように図太い声で鳴いている。

「グエツ、、、グエツ、、、。」

「誰が最初にあいつに石を当てられるか競争しようぜ！」

少年達はこぞって向こう岸で鳴いているガマガエルに向かって、石を投げ始めた。

全く当たる気配もなく、当のガマガエルも呑気に首を揺すったりしながらくつろいでいるようだった。

少年達が諦めかけた頃、一人の少年の投げた少し大き目の石が、ガマガエルの脳天に直撃して、大きな音を立てた。

グチヨッ！

その瞬間、ガマガエルの黒緑の皮膚とドス黒い血が後ろのコンクリートの堤防に吹き飛んだ。図画工作の授業中にストローで絵の具を混ぜた水を噴いて出来上がったような、不思議で華麗な模様がその壁面に描かれた。

少年達は、その不思議な模様の瞬きもせずにジッと見つめたまま静まり返った。

川辺には、水のせせらぐ音だけが響き渡る。

長い沈黙の後、少年達は一言も言葉を交わさず、まるで何も起きなかったかのように、一人また一人と家路についていった。

僕はみんなが帰った後、靴を履いたままで川を渡り、その模様のそばまで行った。

一人でそれを飽きることなく、じつと眺めていた。生まれて初めて生物を殺めたことに対する罪悪感なのか、それともその描き出された不思議な模様に対する興味なのか、僕には、よく理解出来なかった。

ただ、僕の足元に転がる頭のないガマガエルの体、描き出された模様の中に含まれているガマガエルの目玉、黒緑の皮膚、脳みそ、それら全てが異様に愛おしく思えた。

段々と辺りが暗くなり始め、僕は急いで張り付いていた目玉を人差し指と親指で潰れないようにやさしく摘まんで口の中に入れて持ち帰った。

あのガマガエルの事件以来、僕の中の何かが変わっていくのが分かった。

殺したい、殺してしまいたい、、あのガマガエルみたいに頭を吹き飛ばしてやりたい、、コンクリートの壁にこびりついたあの模様は、僕の頭の中にもこびりつき、擦っても、擦っても取れなかった。

頭のないガマガエルが、僕の足元でピョンピョンと飛び跳ねている幻覚が時折僕を苦しめるようになった。この異常な感覚はほとんどエスカレートしていった。

（誰かに止めてもらいたいこの衝動。僕は気違いなのか、、？）

（このまま大人になってしまったらどうになってしまうのだろうか、、？）

学校は僕にとって、苦痛以外の何物でもなかった。

仲のいい友達、、実際は仲のいい振りをしている友達はおくまで、大人達に怪しまれないようにするための道具でしかなかった。

休み時間や放課後に校庭で友達と遊んでいるふりをしておけば、大人達はそれで僕を普通の人間であると思ってくれた。

そして僕は、日々もう一人の、普通人間としての僕を作り込んでいった。

もう一人の僕は授業中に、くだらない質問に「ハイッ」と言って手を挙げて、先生が望むような解答をした。先生の面白くもないダジ

ヤレに皆が笑うように僕も真似をして笑ってみせた。作り笑いをし過ぎて頬の筋肉は常に引き攣っているようだった。

本当の僕は、、そんな日々をじつと耐えて、まるで、暗い押し入れに閉じ込められているようだった、、。

学校での全てが苦痛で限界がきていたちょうどその頃、学校に子ヤギがやってきた。

僕達の学級みんなで飼うヤギだ。本当の僕にとっては、その子ヤギは全ての苦痛を忘れさせてくれるモノだったのかもしれない。一時の間だけは、、。

真つ黒に日焼けして、小汚い麦藁帽を被ったおじさんがその子ヤギを引き連れてやってきた。その日は、印象深く僕の頭に焼きついていた。

まだ小さくて毛が生え揃っていない子ヤギは、恐らく連れてこられた当日に、親ヤギから離されたばかりだったのだろう。ひどく怯えきった表情で、麦藁帽のおじさんが引く手綱を死ぬ程に嫌がっていた。「メエー」と鳴きながら嫌がるその表情は僕の心の奥底に隠れてあった衝動を覚醒させていった。

その白くて、華麗で、か細い4本の足は小刻みに震えていた。ハンマーでその膝を叩けば簡単に反対向きに折れ曲がるような、そんな弱さが魅力だった。

クラスみんなでそのか細く、震える足を触る。その細い首を触る。小さくてすぐに取りれそうな耳、尻尾、ありとあらゆる部分を触った。たくさんの手がその白くて弱い生物の感触を味わって、犯していく。なすすべもなく茫然として、ただ震えているそれは、今この瞬間に一体どういう気持ちなのだろう。その気持ちを想像するだけで、僕

は、背中がゾクゾクとするのを感じとる事が出来た。

「さあ、ヤギさんにご飯をあげたい人いる？」

先生が僕らに言った。

僕は真っ先に手を上げた。

「ハイッ。先生僕がこの子にエサをあげたいです。」

先生に手綱を引っ張られて、引きずられるように小屋に押し込まれていく子ヤギ。

「メエー、メエー、メエー、。。。」

この世の終わりであるかのように鳴き叫び、引きずられていく子ヤギの後ろ姿を、僕はうつとりしながら見ていた。そのお尻に付いているボンボリのような白い尻尾を、僕のこの口で食いちぎって食べてしまいたいという衝動をかるうじて抑えつつ、僕は後ろを歩いて歩いた。

「さあ、小屋の中に入ってここにある草をあげてみて。」

僕は、その臭そうな小屋に入るのはかなりの抵抗があったが、この子ヤギに、この僕の汚れた両手で、生きる糧となるモノを与える事が出来ると思うと、何か征服感のような、心が満たされていく気分になれ、かるうじてその匂いが我慢出来た。

「さあ、お食べ、ヤギさん。」

（僕がいなければ、何も出来ない子ヤギさん、、僕はこの手に置かれた命の糧を喰いなさい、、。）

その子ヤギの細く伸びた口元を左の手で掴み上げて、僕の右手にあるモノを口の中に詰め込んであげたい。そして、僕のこの右手の拳をその小さな、小さな口の中の、奥の奥まで突っ込んであげたい。

そんな妄想を抱きながら、僕はみんなが見ている前で、引き攣った笑顔で乾し草を与えた。

僕の広げられた手の平の上の乾し草はあっという間になくなった。

先ほどまで、震えて怯えていたはずの子ヤギは、僕の手を舌で舐め始めた。

「メエ、メエ」

それを見ていたクラスみんなは一斉に笑った。

「キャハハ、わあー、ヤギさんお腹すいてたのかなー？おかわりだつてー！」

僕一人が取り残されたように、無言でそのヤギの卑しい目を見下ろしていた。

（さっきまでの恐怖で慄いた表情はどこへいったんだ、、。あんなにも怯えていた子ヤギさんは一体どこへ行ってしまったんだ、、。）

（この卑しいクソヤギめっ！）

猛烈な怒りが僕の中心から湧き上がってくるのを感じていた。

今すぐに、みんなの前でその卑しい舌を引っ張り出して引きちぎってやりたかった。そして、引きちぎったその舌で、こいつの首を絞めてやりたいとさえ思った。その光景をクラスみんなが見て、その汚らしい笑いを、恐怖で泣きわめく顔に変えてやりたい、、、。

それ以来僕はそのヤギが大っ嫌いになっていた。

世話当番は二人一組で小屋の掃除、餌やりを行うことが決まった。僕は毎回、自分の当番の時には、もう一人の友達に見られないように、モップの先でヤギの頭を小突いた。

小突いた瞬間の「ポンッ」という乾いた音がその小屋に響き、その音で幾分か、僕が最初にエサをあげた時に受けた屈辱が薄れていくような気がした。

小突かれた子ヤギは一瞬何が起こったか分かっていないような、キョトンとした表情をする。

「ククククッ、、、。」

僕は必至で、こみ上げてくる何ともいいようもない愉快で爽快な笑いをもう一人の当番の子にばれないように押し殺した。

（なんて、間抜けな生物なんだろう、、、。）

（そのポンッという、歌舞伎役者さんが舞台で肩に乗せて叩く、小さな太鼓のような音、、、。自分が危害を加えられ、危機的な状況

にあることさえ気づかない哀れな生物、小ヤギさん、、、。もう二度と僕に恥をかかせるようなことをしちゃ駄目だよ、、、。）

あるヤギ当番の日、僕は運動場の隅にある道具置場にいた。薄暗いその小屋で僕はグラウンドに白線を引くための真っ白な粉を、隠し持っていたビニール袋へと詰め込み、半ズボンの後ろポケットに忍びこませた。

ヤギ小屋では、既にもう一人の当番の子が汚れたコンクリートの部分を水で洗い流している最中だった。

「遅くなってごめんねー、僕が残りの掃除とエサやりしておくから先に帰っていいよ。」

「えっ、本当？いいの？」

「いいよ、いいよ、僕、遅くなったんだから、後はやっておくよ。」

「ありがとう、じゃ、掃除用具はここに置いておくね。じゃーね、バイバイ。」

「うん、気を付けてねー、バイバイ。」

辺りは徐々に暗くなり始めていた。

やっと、この時がきた、、、このふてぶてしくて太ったブタのよくなヤギ、、、。あの、か細くて、折れそうな足は、今では、ずんぐりと、子ゾウのような足に発達していた。

夕日が沈みかけ、真っ赤な空になる頃、僕は後ろポケットからビニ

ールに入った白い粉をゆつくりと滑り出し、そして、乾し草にたっぷりとかけてやった。

白い粉が真つ赤な夕日に反射して、それがやけにドス赤くてオドロオドロしいものに変貌した。たっぷりと焦らしておいたせいかな、ヤギはそれを何の疑いもなく頬張った。

少し、食べ始めた頃、ヤギは首を小刻みに揺らした。

「メメメエ、、、、。」

少しの間、首を揺らしながら、そのヤギは遠くを見ているような目つきになった。

（さようなら、、、、汚くて醜いヤギさん、、、、。）

バタンツと、その場で汚れたコンクリートの地面に倒れるイメージが僕の頭の中を駆け巡った。

「ブルンツ、ブルブルンツ、、、、。」

クシャミのような鳴き声を立てた。

（よしっ、、、、倒れろっ！）

僕の意に反して、何事もなかったかのように、ヤギはまたそれを食べ始めた、、、、。

モシャモシャと口を左右にこするようにしながら、食べきった、、、、いつも通りに、完食、、、、。

（直ぐには、、、、死なない、、、、？）

（そうか、、、そうなんだ、、、でも、明日になれば、、、、。）

僕は、少しがっかりした気持ちもあったが、大きな期待を胸に、久しぶりに清々しい気分で下校した。

翌朝、僕が学校に来た時、ヤギ小屋に人だかりが出来ていた。

（やっぱり、、、、。キャキャッ、、、、）

僕は嬉しくてスキップしたい気分だった。その気分を抑えながら、涙を流す準備を始めた。ちゃんと泣けるだろうか、、、それだけが心配だった。

（感情を抑えられずに嫌らしい笑みが出てしまったらどうしよう、、、みんなが僕を疑うに決まっている。）

ドキドキとした気持ちのままその小屋に近づいた、、、、。

少し、想像していた状況とは違っていた。

誰も涙は流していなかった。

（な、なんだ、、、なんで、みんな泣いてないの、、、、？）

みんなは、何か不思議なものでも見るような、真剣な目付きで小屋を覗きこんでいた。

その時、耳を疑うような、、、、あれが聞こえた。

「メエ、、、、メエ、、、、」

(えっ、、、何何何???)

「メメメエ、、、」

「嘘だ、、、嘘だ、、、有り得ない、、、。メエーなんて有り得ないだろ、、、。」

僕は、思わず口に出して呟いていた。

人だかりから出てきた子が、言った。

「ほんと、有り得ないよ、、、。」

僕は人だかりの中を掻き分けて、ヤギ小屋を覗きこんだ。

(白いあいつが、、、二つ、、、?)

見えたような気がした。そして、じつくりと凝視した。

(一つはあいつ、、、もう一つは、、、)

真っ白な糞だった、、、。

真っ白なペンキをぶちまけたような半分裂体、半分個体の白い糞だった。

「あり得ない、、、。」

僕はあまりの落胆に気が遠くなりそうになり、その場にしゃがみ込んだ。

（また、、こいつは僕を侮辱した。）

ヤギは、しゃがみこんでいる僕の目の前に来て、また鳴いた。

「メメメエ、、、、」

そして、僕に汚ないお尻を振り向けて、小屋の奥の方へ、ノツソリノツソリと歩いていった。ヤギのお尻に付いている巨大化したボンボリのような尻尾が左右に振れる。まるで僕に何かを伝えているようだった。

（完全に僕をコケにした。許せない、、、許せない、、。いつか、いつか、、その汚い首を切り落としてやるっ、、。）

数か月経った頃、事件が起こった。

学校に行くとヤギ小屋の前には、白い糞事件の時のように、クラスの皆が集まっていた。僕も大急ぎでヤギ小屋の前に走っていった。そして、肩で息をしながら、状況を把握しようとしていた。

今回は白ではなく、赤い液体が見えた、、。

ヤギは小屋の屋根上から僕達を見下ろしていた、、。その神々し

く潤んだヤギの目は小屋の裏側にそびえ立つ銀杏の木漏れ日に時折照らされて瞬きしているようにさえ見えた。

ヤギの血に染まった頭部だけが、小屋の屋根の上に置かれていた。

トタン屋根の先端からは、ヤギの赤黒い血液がポタツ、ポタツと一定のテンポで落下していた。

その赤黒いヤギの血は、コンクリートの地面に血溜まりを作り、そこに目掛けて次の血滴が落ちて、血溜まりに波紋を描きながら飛び散る。その度に一番前にいる女子がビクツと反応して後ずさりをする。

僕はポケットに入れてあった工作の時間に使うカッターの事を思い出して、ゆっくりと手をやり、握り締めた、。僕のポケットからも血が滴り落ちている気がして恐ろしくなり、握りしめたままの状態でまるでマネキンの手のように動かなくなってしまった。

ヤギの頭は誇らしげに僕たちを見下ろし、まるで宣教師が皆に語りかけているようだった。

恐がらなくてもいいんだよ、さあ、こっちにおいで、。

女子達は肩を寄せ合って小刻みに震えながら声を殺して泣いている。男子達は早く先生が来て、金縛りにあってしまったように動けないでいる僕たちを解放して欲しいと一様に願っていた。

そんな中、僕の脳ミソの奥の方で赤黒いマグマがグツグツと沸騰しているのが分かった。

みんなの前でそのマグマが僕の頭の天辺から噴き出してしまったらどうしよう、。

もしも、みんなにそのマグマが飛び散ってしまったら大やけどをさせてしまつたろう。

しかし、僕のマグマは、頭の天辺に開口部がないことを知ると一気に僕の下へ、下へと下っていった。そのマグマは胃袋の中で一杯になるとそこから僕の膀胱へ溜まり始めた。

そして、僕は猛烈に尿意を催した。我慢している内に、マグマの熱のせいで僕の性器は熱くなり、ドンドンと大きくなっていくのが自分でも分かった。

僕らの目線より少し上のあの屋根の上に登って、ヤギの宣教師の頭に、このマグマを発射してやりたい。僕の赤くてネバネバしたマグマでその神々しい瞳を跡形もなく溶かしてしまいたい。

そして、今まで築きあげてきた宣教師としての地位も一瞬のうちにゼロにしてしまいたい。

周りにはクラスみんなが大勢いるはずなのに、なぜか、僕と、そのヤギの頭だけが空中に浮かんでユラユラと揺れているような、そんな不思議な意識の中で、僕はずっと佇^{たたず}んでいた。

悶々とした気分のまま授業を終えて自宅へ戻り、直ぐに布団へ潜り込んだ。僕のポケットに入っていたカッターを握りしめ、この抑えようのないムラムラとした気持ちと格闘していた。

とにかく僕が、、僕自身が爆発してしまわないように、早くこの时限爆弾を処理しなくては、、。

ここに存在する僕という人間がなくなってしまうえば、いや、もともと僕という人間が生まれていなければ良かったのに、。

僕が生まれていなければ、この暗い布団の中で今にも爆発しそうな時限爆弾を抱えて恐怖に慄かなくて済んだはずなのに、。

机の上に置かれた目覚まし時計の秒針の音がまるで爆発までの時間を刻んでいくチクタク音のように僕を追いかんていった。

どれ位そのチクタク音を聞いていただろう。

突如裏庭で、僕の大嫌いなあの犬がやかましく吠え立てるのが聞こえた。チクタク音は急に聞こえなくなり、その代わりに今度は抑えられそうもない怒りの感情が芽生えてきた。

自分がこんなにも苦しんでいるのにあの犬は呑気に、腹が減れば吠えまくり、散歩に行きたければ吠えまくり、僕という人間を、生まれて小さな可愛い子犬だった頃から見下していた。もう許せなかった。絶対に許せない、。

布団を放り投げて誰もいない家の階段を一気に駆け下り、一階の裏庭につながっている勝手口の前で立ち止まった。そして、手に握り締めていたカッターの刃を親指で弾き出した。

カチカチカチッ、。

流し台のステンレスに乱反射する赤い夕日が鋭いカッターの刃にも映り込んだ。

ポタツ、、、ポタツ、、、

蛇口から一滴一滴落ちてくる水滴の音だけが僕の耳に入ってくる。

犬のキャンキャンという悲鳴にも似た鳴き声が、僕の頭の中の核爆弾の発射ボタンの上に置かれた人差指の内側の筋肉を強烈な力で引っ張った。

その後はまるで練習を積み重ねて舞台に立った役者のようだった。

もう一人の自分を、舞台の袖から見ていような不思議な感覚で、どんな演技をしてくれるのだろうという解放されたような、同時にワクワクした気分で自分の行動を見守った。

鋭い歯が飛び出したカッターを強く握り直し、勝手口のドアを開ける。

ガチャ、キー、、、。

裏庭へ出るためのドアを開ける音が台所に響き渡った。

あれだけうるさかった、あの犬の鳴き声も、もう僕には聞こえていなかったのかもしれない。ただ、冷たい風が僕の火照った頬に当たる感覚が心地よく、さあ、これから新しい世界へいくんだよ、、、と僕を後押ししてくれているようにさえ思えた。

ペチ、ペチ、ペチ、ペチ、、、

既に薄暗くなり始めていた裏庭を、犬小屋へと歩いて行く僕の裸足の足音が異常に大きな音のように聞こえた。僕の右手に持ったカッ

ターの刃が、僕が歩く度に、落ちかけた夕日に反射してキラリと鈍い光を放った。

犬小屋へ一歩一歩近づいていく。一歩一歩踏みしめながら近づいていく、、、。

僕はいつからそこに立っていたのだろうか？

右手にカッターを握りしめたまま、汚くて臭い肉の塊を視点の合わない目で見降ろしていた。

ドス黒い血が辺り一面に飛び散り、赤い首輪が転がっている辺りが、こいつの首の位置だろうという事くらいしか分からなかった。

ハツと我に返り、ゆっくりとそいつの方へ屈み、カッターの刃先で肉の塊をいじくりまわした。

どこと、、、どの肉をくっつければ元にもどるだろうか？

接着材は確か父さんの机の一番上の引出に入ってたはずだ。

父さんが戻って来るまでに全部くっつけて元にもどしておかないと、、、父さんはこの犬が大好きなんだから、、、。

こいつがこんなにバラバラになっているのを見ると父さんは悲しむに決まってる。

早く、早くこの塊をくっつけなくては、、、。

僕は必至で握っているカッターの刃先でその肉の塊の分類作業を始めた。

塊の仕分けに熱中しすぎていたのか、後ろの人の気配に気づいたのは、自分の手元が影で真っ暗になって作業が続けられなくなっただった。

「お前が、、、やったのか？」

震える声が遠くの方で聞こえた気がした。

僕の全身の血液が一瞬止まって、そして逆流を始めるのが分かった。

「お前がやったんだな、、。」

父さんの声、、？

はつきりと僕の頭の上から聞こえた。

ストップボタンを押したい、、、そして巻き戻しボタンを押させて下さい。一度だけ、一度だけでいいんです、、。

ひたすらにそのボタンを探す事しか僕の脳ミソは動かなくなっていた。

父さんは後ろから僕の手を持っているカッターを取り上げて放り投げた。

暗闇の中でカランカランツという、カッターがコンクリートの犬走りの上を転がっていく音だけが裏庭に響き渡った。

次の瞬間、僕の髪の毛が物凄い力で引つ張られたと思ったのも束の間、重力に逆らって僕の体は宙に舞っていた。

父さんの鬼のような形相と肉の塊がミキサーに掛けられているみたいにグルグルと廻っていた。

「僕じゃない、、僕がやったんじゃないよ、、父さん、、僕なの？僕なの？僕、、？助けて父さん、、許して父さん、、」

僕は宙を回り、そのまま何か硬いものに当たった後に地上に落ちたようだった。父さんの震える後ろ姿が、暗い裏庭にスポットライトを浴びているように浮かび上がっていた。

やっぱり、、僕は、、生まれてきちゃいけない人間だったんだ、、、そうでしょ、、、父さん、、。

それ以降、父さんは僕を見る度に、気違い人間を見る目になり、そして汚い言葉で僕を罵った。僕の大好きな父さんには、もう二度と会えなかった。

そして、僕は一人ぼっちになった。本当の意味での一人ぼっちだった、、。

自分がどうやってあの犬を殺めたのか必死で思いだそうとしていたが、どうしても思い出せずにいた。

それから一カ月が経った頃、この近所で犬や猫を殺して、うさ晴らしをしていた浮浪者が逮捕された。

そして、学校に忍びこんでヤギを殺した事も自供した。

第7章 暴力（前書き）

鍵穴の中に現れる親子、ゝゝ。自分とどういう関係があるのだろうか。

第7章 暴力

この閉ざされた空間の中へ、自分の体の中にある液体は全て放出してしまっただかのように思えた。

白かった床や壁も今では自分の小便や血などの体液でドス赤黒の様で占領されていた。

それらから染み出してくる悪臭は全ての生物を一瞬で溶かしてしまえる程だろう。

その模様は俺が目をつむる度に動きだして、組みあがり、そして、この空間の天井まで届く程の大男になった。

また、、始まった、、。摩訶不思議でバカげた現象が、また始まりやがった、、。

この空間が起因しての現象なのか、俺のいかれた脳みそが起因しての現象なのかは、どうやったって分からなかった。

もう、この頃になると俺は無抵抗に、そういった現象を受け入れるようになっていた。

恐れや不安もなく、同時に楽しみや、喜びもなく、ただ受け入れた。

地球上の生物は、産まれた瞬間から、死の瞬間までごく当たり前に呼吸をする。それと同じように、しごく自然にそういった現象を受け入れる事が出来る体質になっていたのかもしれない。

その組み上がった大男は俺の存在に気づき、語りかけた。

「お前、、誰だ？まあ、そんな事はどうでもいいんだが、隅っこで隠れてないでこっちへこいよ。近くへ来て美しいこの俺の体を見てくれよ。」

無視しても、無視してもそいつは俺に語りかけて、いかに自分の姿恰好が美しいのかを自慢する。

そいつの自慢話にはいい加減飽き飽きしていた。

「あー、、、確かに美しいな、、、お前が俺のクソの塊で出来ている点を除けばな、、。」

俺がこう言つてやると、今まで自信满满だったそいつは急にしょんぼりとして、小さくなって、そして消えてくれる。

いくらか時間が経つとまた同じように、そいつは現われて自慢話を語り始める。

「おいつ、そこに座っている、そうお前、俺のこの腕を見てくれよ、太くて硬くて、血管が浮き出ているだろう？」

大男は右腕を曲げて、力こぶを作つて見せた。

俺はその大男に尋ねた。

「その力こぶの中身は何なのか知っているか？」

「そ、それは、、筋肉だよ、そう、俺の鍛え上げられた筋肉が詰まっているのさ。」

大男は一瞬たじろいで言った。

「ククククツ、、、教えてやるよ、そのお前の力こぶの中身は俺の鼻水だよ。キャキャツ、、、。」

俺は笑いを堪えながら、言っちゃった。

「う、嘘だ、、、そんなわけないだろう、、、そんなわけ、、、。」

大男はがつくりと肩を落として、自分の体を凝視した。

そして、また小さくなって消えていった。

今度は、どう言ってその大男をしょんぼりさせてやろうかと試行錯誤していた。

クソの塊を苛めるのも段々と面倒臭くなっていた頃、鍵穴から声が聞こえた。鍵穴からというよりは、単なる俺の幻聴がまた始まっていただけなのかも知れない。

声が聞こえたその瞬間、またキャッチボールのイメージが頭に浮かび、無我夢中で鍵穴に貪り付いた。四つん這いの状態で、ゴキブリが這うように鍵穴まで必至で這って行った。

ガツンツと大きな音がした。

鍵穴上部の壁に、覗き込む際に自分の額をぶつけた音だった。タラタラと額に血が流れてきたが、鍵穴に没頭し過ぎて痛みも感じ

ず、気にも留めなかった。

鼻息は荒く、眼球に映る映像が早く脳まで到達出来るように、後頭部に自分の10本の指を押し当て、目一杯に掻き毟った。そして、ゆっくりと組み上がってくる映像に意識を集中させた。

そこに子供は、、いなかった、、。

鍵穴の中では、学生服らしい黒い服をきた青年数人が缶ビールを片手にたむろしていた。

その青年達は缶ビールをグビグビと音を立てながら飲み、喉仏を上下に動かしていた、、。

前回とは全く違う情景が鍵穴の向こうにあった事に対する驚きよりも先に、「缶ビールを飲む」という行為自体が衝撃的で、鮮明で、俺の脳みその中心を激しく刺激した。

そして、いつの間にか鍵穴の向こうに見える前回とは違った情景に対する違和感もなくなっていた。

俺は青年達が缶ビールを飲む動作に合わせて、生唾をゴクリと飲み込み、自分の喉仏を摘まんでみた。フツフツと俺の中のアルコールに対する欲求が湧き上がり、体が熱くなっていくのが分かった。

まるで体全体が熱い鉄板のようになり、内部から絞り出された汗が皮膚に流れ出た瞬間にシュツという音を立てて蒸発していくようだった。

俺は堪らず鍵穴のある壁に自分の爪が食い込むほど押し当てて、叫んだ。もう、その光景が現実のモノなのかどうかなど、一切の疑問は俺の頭の中から吹き飛んでいた。

「お、おい、お、お前らゝひっ一口飲ませろ、」

俺の声に気付いてないのか、俺の声自体が実際には出ていないのか
自分でもよく分からなかったが、とにかく無我夢中で叫んだ。

「た、頼む！――一口でいいんだ！」

「た、た、頼む！」

「お、おい、き、聞こえてないのか、クソックソックソッ！」

泣き声になって叫び続けた。

どれ位の間叫んでいたのか思い出せないが、ふと我に返ると、叫び疲れて意識が朦朧としていた。

鍵穴を覗くまつ毛に、液体がまとわりつくのを感じ、目を少し鍵穴から離してその液体の正体を確認してみた。

自分の額から流れ出る血液、そして壁面に押し当て過ぎて、何本かグラグラになっている爪から流れ出る血液であった。

その血を見た瞬間に剥げかけた爪の指先に電気が走るような痛みを感じた。

鍵穴下の口元の部分の壁も、よく見ると自分の喉の血管が、叫び過ぎて裂けていたらしく、ドス黒い血が飛び散り、奇妙な点の模様が出来上がっていた。

鍵穴の光に別の影が映っているのが分かり、また夢中になって鍵穴

を覗きこんだ。

鍵穴の中の光景にまた意識が集中していくに従って、指先、額、そして喉の痛みは薄れていった。

スーツ姿の中年男性が現れた。

先の青年達と口論となっっているようだった。

俺はその中年男性に向かって精一杯の声を振り絞ってまた叫び始めた。

「お、おいっ、そ、そのオッサンっ！そいつらの持っている、か、缶ビールを取り上げる、。こ、この穴に注ぎこんでくれっ、な、？いいだろ、？」

鍵穴の中では、俺の存在を無視するかのよう口論が続いていた。

俺の声はやはり誰にも届いていないようだった。

俺の両手の指先の力はゆっくりと抜けていき、深い絶望を感じ始めていた。

砂漠の中の蜃気楼によって出来たオアシスを追いかけているのが分かった時に感じる絶望感とはこういうものだろう。

ぼんやりとした意識の中、うつすらとその二人の口論している内容が聞こえてきた。

「うぜえ〜んだよ、オヤジ。たのむから消えてくれよ、まじでっ。」

「いいから、帰るんだ。」

周りの青年達はこぞって二人の口論を茶化し、煽りたてた。

「ヒヤヒヤッ、、、ちょーカッコ悪イ、、、。」

どうやらこの二人は親子のようだった。

少しの間やりとりをしていたようだが、そのうちにまわりの青年達も、その中年男性を取り囲むような情勢になっていった。

息子らしき青年が、その父親らしき中年男性の胸元を掴んでいきり立っているのが、青年達の隙間から見えた。

周りの青年達も更にエスカレートしていき、遂には倒れている父親を青年達が袋叩きにしていた。

鍵穴を覗いていた俺は無意識に呟いていた、、、。

「や、、、やめろ、、、バカッ、、、た、、、頼むから止めて、くれ、、、。も、もう、、、いいだろ、、、。」

俺の中に怒涛のように悲しみが押し寄せた。

青年達の内の一人が、その父親らしき中年男性に向かって叫んだ。

「ほら、、、土下座して謝れよっ！」

父親らしき中年男性は小刻みに震えながらゆっくりと膝をついて土下座の姿勢になった。

正面にいた青年は中年男性の髪の毛をわし掴みにして言った。

「おらおら、、情けないオヤジよ、ここにいる息子に謝れよ。
もう偉そうなこといいませんってよ！またボコボコにされたいのか
よっ！」

「す、、すみませんでした、、。もう、、」

消え入るような父親の悲痛な声。

「聞こえないんだよっ！」

青年の中の一人がうなだれる中年男性に唾を吐きかけて叫んだ。

中年男性はそのままひれ伏して、震える声を絞り出した。

「すみません、、でした、、。もう、、偉そうな事は、、
いいま、、せん、、。」

そのまま中年男性は倒れ込んだ。

「おい、、許してやるか？」

正面にいた青年は、ニヤニヤした顔つきで、奥にいた息子らしき青年に問いかけた。

息子らしき青年は、倒れてグッタリした父親に歩み寄り、中年男性の耳元で何か呟いた。

「死ねっ！死ねっ！死ねっ！」

鍵穴を覗きこんでいた俺の口元からも同時にその予期せぬ言葉が自然に発せられていた。

自分の口から出た言葉とは信じられず、下唇を両手で思いつきり引っ張って伸ばした。

「ウツ、、ウツ、、。エツ、、？死、、ね、、？」

引っ張った下唇を伸ばしたまま、声にならない声を絞り出していた。何とも言えない絶望感、刹那さ、悲しみ、後悔、人間界における全ての悲観的な感情が大波のように押し寄せてくる。

溺れる、溺れてしまう、この大波に飲み込まれて、深い深い絶望の海底へ引きずり込まれる、、。

俺は、その大波が恐ろしかった。

爪が剥げかけて血まみれになった両手で鍵穴を塞いで、その場に座り込んだ。長い間その状態で大波が通り過ぎるのを震えながらじっと待った。

自分が発した「死ね」という言葉が頭の中でグルグルと回っていた。その言葉をどこかへ弾き飛ばしたいという衝動から、また自分の下

唇を目一杯に引っ張って離れた。

下唇が跳ね返ってくる反動で頭から離れないでいる「死ね」という言葉が飛んで消えてくれる事を願った。

「お、、俺はそんな事言ってるじゃない、、お、、俺じゃない、、あ、、あいつが言ったんだ、、。。。ブァッ、、、プァ、、」

ブツブツと呟きながら、何回も何回も、、それを繰り返していた。

何回目だったかよく覚えてはいないが、下唇を離れた瞬間に前歯に何か固い物が当たり、跳ね返ってコンクリートの床に転がっていく音がした。

カチンツカチツカチツ、、

じっと目を凝らすと、汚い床面に丸く不気味に青白く光る物体が転がっていた。

一瞬その物体が何なのか分からなかったが、自分の指先に忘れていた痛みがまた走ったことで、その物体の正体はすぐに分かった。

自分の剥がれた爪であった。

あまりの痛み到我を忘れ、四つん這いの状態で血まみれの額を床に何度も叩きつけ、尻を天井まで届く程に高く突き上げた。とにかく指先の痛みが去ってくれるのを、その体勢でじっと待っていた。

「ギャッ、、、ギャッ、、、い、、痛い、、、痛いよ、、。。。」

四つん這いの状態で、額を床に擦り付けながら俺は遣る瀬無い気持ちに溺れていた、、、。

なぜ、自分の口から「死ねっ」という言葉が発せられたのか、、、
ずっと考えていた。

というよりむしろ、客観的にあの青年はなぜ、自分の父親であろうあの男性に、そのような醜い言葉を浴びせたのか、、、。

俺自身の記憶の糸を辿るがどこにも辿りつけないでいた。

俺には父親はいないのか、、、？

父親以外の記憶の筋を辿っても同じ事だった。もしかしたら、俺はこの空間で生まれて誰にも会わずに生きてきたのだろうか、、、？

いや、有り得ない、、、そんな残酷で奇異な人生があるわけがない。

ともかく、もしも俺に父親がいたとするならば、あのような言葉が実の父親に対して言えるのだろうか？

大きな悲しみの闇が、また俺を包みこもうとしていた。

自分を育ててくれた人を、なぜあのような悲しみの底へ突き落すような惨い行為、発言が出来るのだろうか、、、？

父親からどんなに残酷な仕打ちをうけようとも、例えばどんなに情けない父親であろうとも、決してあのような事が自分に出来るとは思

えなかった。

自分のこの口から、同時に発せられた「死ねっ」という言葉は一体なんだったのだろう、、、、もしも俺に父親がいるとするならば、、俺が、、俺がそんな言葉を自分の父親に向かって言えるわけがない、、、、。

そう、言えるわけがないのだ、、、、何かの間違いだ、間違いのはずだ、、。

必死に自分自身に言い聞かせていた、、、、あれは何かの間違いだと。

鍵穴の向こうに広がる楽しい光景、悲しい光景、、、、何なんだろう、、、、？

涙がとめどなく溢れ出てきたキャッチボールの光景、、、、鍵穴の中の青年と同時に、俺の口から発せられた「死ね」という言葉、、、、。

葛藤の中で、少しずつ鍵穴に対する疑問の、絡み合った糸がほどけていくような複雑な気分だった。

俺の目の前に立ちはだかるその大きな疑問を、ベルリンの壁をハンマーで碎き壊すように、消し去ってしまいたい、、、、いや、、いや、、違っ、、、、ずっと、絡み合ったままの方がいいのかも知れない、疑問はずっと疑問のままの方が幸せなのかも知れない、、、、。

ベルリンの壁が無くなって幸せになれた人が一体どれ程いる、、、、？分からない、、、、誰にも分からない、、、、俺にも分からない、、、、。

男は四つん這いの状態で額を床に擦りつけ、時折叩きつけた。

その状態のままでブツブツと独り言を呟きながら、閉ざされた空間の中で、ずっと、苦悩していた。時折その空間の中で男が叫ぶ声がこだまする。

「違うっ!」

「俺じゃない、、、」

「いや、、、いいんだ、、、」

「いや、、、俺、、、なのか、、、?」

「俺は、、、誰だ、、、?俺は、、、」

第8章 悪魔（前書き）

どんどんと深みにはまっていくその男、ゝゝ。

第8章 悪魔

あの事件さえなければ、、

父さん、、僕じゃないよ、僕じゃなかったでしょ、、？

僕とまたキャッチボールしようよ、、ねっ？

何度も何度も自分の中で繰り返してきた言葉。手遅れにならない内に、父さんにこの言葉を伝えなくてはいけないと思っていた。

あの裏庭での出来事が僕の頭から一秒たりとも離れたことはなかった。あの事件以来、父さんの鬼のような形相と、あの犬の肉塊がグルグルと僕の頭の中で回り続けていた。

ちよつとした言葉、ちよつとした勇気で僕と父さんの関係は修復出来たんだろうが、いざ、その場になると、途轍もない重たい空気で僕は窒息しそうになり、何も言えなかった。

そして、その重たい空気の中で窒息して溺れてしまうのが怖くなり、僕の膝はガクガクと震え始める。いつその事、僕が溺れてしまう前に父さんに僕という人間を殺して欲しいとさえ思った。

父さん、さあ僕を見て、、助けて、、僕が僕じゃなくなる前に、あの殺された犬のようにズタズタに切り刻んで殺してしまつて、、。

大好きな僕だけの父さん、、さあ、キャッチボールの時に見せて

くれたあの笑顔で、僕を一刻も早く切り刻んでしまつて、。

時を重ね、父さんに対する僕の愛情は、徐々に憎しみへと変わっていった。

それは憎しみではなく、変形してしまった奇形の愛情だったのかもしない。

僕にはどうすることも出来なかった。その憎しみに似た感情は日々大きくなっていき、転がり過ぎて大きくなりすぎた雪だるまのように、僕にも、誰にも止められない状態になっていった。

父さんもいつしかこんな僕を遠ざけるようになっていった、僕にはそう感じられた。

いつしかその憎しみに似た感情は僕の頭の中で鬼に変身した。そいつは今では僕という存在さえも無視するように、自由奔放に振舞うようになっていた。

僕の頭の中に巣食うその鬼はもう誰にも止められなかった。

そして、そいつは僕の頭の中で、僕の全てを奪っていった。僕の両手、両足に鉄製の杭を打ち込んだ。

肉が弾け、骨が砕けて、僕が横たわっている硬いコンクリートの地面までその杭は貫通している。

僕の口には何十本もの針が通されて、言葉さえも奪われた。

もう、誰にも僕は救えない。

そつ、もう父さんにだって救えない。

僕は悶々とした日々を過ごしていた。

次元も時間もないゼロの中で、僕という人間は張り付けられたコンクリートの塊と一緒に漂い続けているようだった。

いつしか、学校には行かなくなっていた。

不良グループのメンバー達と、いつものように、行くあてもなく街を彷徨っていた。

大人は仮面の下、その汚くて、ズル賢くて、醜い目で、いつも俺達を執拗に見張っていた。

恐喝、万引き、シンナー、ドラッグ、窃盗など、ありとあらゆる悪事に手を染めていくのにさほど時間はかからなかった。

落ちていく、、、どこまでも、、、あつという間に落ちていく、、、。

さあ、これで満足だろう、、、？仮面を付けた大人達よ、、、。

「やっぱり、、、あの子はそういう子だったよ、思った通りだよ、、、。」

聞こえてくる、、、大人達の満足げな話声が、、、。

俺の中で、落ちていく感覚がいつしか快感に変わっていった。

闇の底に落ちていく俺自身を俯瞰で見ているような不思議な快感だ

った。

俺が警察に補導される度に、オヤジは何も言わずに迎えに来た。何度も、何度でも俺を迎えに来た。

少年指導課の、奥の小部屋に俺はいつものように座らされていた。オヤジの背中が小窓の向こう側で見えた。

制服を着た誰かに何度も何度も頭を下げ、そして、オヤジが何か書いているのが見えた。

一時間もするとドアが開き、オヤジはいつものように俺に一言だけ呟く。

「さっ、、、帰るぞ、、。」

そのオヤジの目は、、悲しげで、切なくて、俺の心臓をえぐり取るうとする。

騙されない、俺は、、そのオヤジが着けている仮面には絶対に騙されない。

一瞬でも油断すると仮面の下に巢食う醜い鬼に、あっという間に心臓をえぐり取られてしまっ、、、。

オヤジだって、他の大人達のように、その仮面の下、汚くて、ズル賢くて、醜い目で、俺を見張っているに決まっている。

出来る限り腫物には触らずに、そして破裂させないように、じつくりと、じつくりと、そして遠くから、、俺が奈落の底へ落ちて、一生這い上がれなくなるのを、、待っているはずだ、、。

自分の手は汚さないように、そして、ツルツルで綺麗な仮面に、俺の汚い返り血が一滴たりとも飛び散らないように、、、待ち続けているはずなんだ、、。

ある日、仲間と学校をサボって公園で昼間から缶ビールを飲んで、シンナーを吸っていた。

大人達は一瞬、俺達を醜い目つきで睨みつけたかと思うと直ぐに表情のない仮面を付けて通り過ぎて行く。

それが俺には滑稽に見えて、可笑しくて、、そして、なぜか寂しかった。

スーツ姿のオヤジは偶然にも、路上でたむろしていた俺を見付けて、また、いつものように言った。

「さっ、、帰るぞ、、帰るんだ、、。」

「うぜえゝんだよ、オヤジ。たのむから消えてくれよ、まじでっ。」

「いいから、帰るんだ。」

なんで、、オヤジは仮面を外さないんだよ、、その仮面を外して本性をみせてみるよっ、、。

俺はオヤジの胸ぐらを掴んで突き倒していた。

その後の事はうつすらとしか記憶がなかった。

仲間達が楽しげに俺のオヤジを罵っている叫び声が遠くに聞こえて

いた。

そして、親父は、俺の仲間達に殴られて、蹴られて、正座をさせられて、、ぼんやりとまるで夢でもみているかのようにだった。

気が付くと、オヤジはぐったりとして地面にうつ伏せに倒れていた。

そんなオヤジを見て、俺の胸は張り裂けそうだった、、。

悲しいのか、嬉しいのか、悔しいのか、寂しいのか、、何がなんだか分からない感情だった。

オヤジに、俺を罵って欲しかったのか？

オヤジに俺は最低のクズ人間だと言って欲しかったのか、、？

分からない、、この気持ちを俺はどうやって抑えつけたらいいのかも分からなかった。

とにかくオヤジの横たわっている地面に腰を屈めた。

オヤジ、、オヤジ、、なんで、、なんで、、俺は直ぐにでもオヤジの胸で駄々っ子のように泣きわめきたかった。

何か、、何かオヤジに声を掛けてあげなくてはいけないと思った俺は、そっとオヤジの耳元で呟いた。

「死ねっ！死ねっ！死ねっ！」

頭が真っ白になった、、、。

なぜ、そんな言葉が出てきたのだろう、、。

訳が分からなくて胸が苦しくて、とにかくその場を駆け出していた。

仲間の呼び掛ける声、笑い声が遠くに聞こえていたが、とにかく一人になりたい一心で走っていた。

というより逃げ出していた。

このまま走っていけば、過去に戻るだろうか、、。

ずっとずっと昔に戻りたい、、。

雨が降り始めた、、。

いつの間にか小さかった雨粒はあつという間に大粒の雨へと変わり、俺を叩きつけた。

「お前は最低の人間だ」と言われているようにさえ感じた。そんな大雨の中、ずぶ濡れで行くあてもなく走っていた。

駅周辺には傘を持っている大勢の人々がいた。

その中に、黄色い雨合羽を着て、傘を持った少年が立っていた。

その少年の前で思わず息を飲み、俺は立ち止まった。そして、金縛りにあってしまったかのように動けなかった。

あれだけやかましかった雑踏の音が瞬時に消えてなくなり、俺の荒い息をする音と雨がアスファルトに叩きつけられる音だけが聞こえていた。

俺が息をする度に白い蒸気が立つては目の前で消えていった。

傘を持って家路を急ぐ大勢の群衆が、俺の目の前を通り過ぎていく。

こんなにも大勢の人がいるのに、まるで俺とその黄色い雨合羽を着た少年だけしかないように感じられた。

間もなく、スーツ姿にコートを羽織った男性が改札口から出てきて、少年を後ろから抱き抱えた。

満面の笑みが少年の顔から溢れだし、その男性の方へ振り返る。

そして、コートを羽織った男性は片方の手で少年が持っていた傘を器用に開いた。

バサッ！！

まるで、その父親の息子に対する溢れんばかりの愛情が弾けるような、心地よい音だった。

この雑踏の中で、実際にその音が聞こえていたかどうかは分からないが、確かに俺の頭の中には聞こえていた、。。

一瞬少年がこちらを振り返り、俺に微笑んだように思えて俺の全身に緊張が走った。

そして少年の開かれた手が父親のコートをギュツと握りしめていく。その瞬間が俺にはスローモーションに見え、その小さな手で俺の心臓をギュツと掴まれていくように感じて胸が張り裂けそうになった。俺は自分の胸に手を当てて、同じように握り締めてみた。

大雨の中、俺は家路についた彼らの後ろ姿をずっと追っていた。

小さく、小さくなっていくまで見つめていた。というより目が離せなかった。

びしょ濡れの俺は、気が付くと涙が溢れていた。

傘を持って行き交う群衆の中、上を向くと、涙が雨と混じり合い、生暖かくなったそれが頬を流れた。

その生暖かい感触が心地よく感じてさらに温かいものが溢れだした。

「オヤジ、、、父さん、、、何でこうなっちゃったんだろ、、、俺、、、。」

オヤジの元を飛び出してから既に10年は経っていただろうか、、、。

オヤジがどんな顔をしていたのかさえ、、、もう、よく思い出せなかった、、、というより思い出さないように努めていたのかも知れ

ない、、、。

俺はいつの頃からか、組織から薬を回してもらい売りさばくことによつて生計を立てるようになっていた。

薬は飛ぶように売れた。

俺の携帯は、薬の注文でひっきりなしに鳴る。

24時間売りさばいた、、、。眠たくなれば自分でも薬を使うようになり、薬の効いている時間は超人になれた。

誰にも俺は止められない、世界中の人々が俺の魔法の薬を待っているんだと、ある種崇高な任務のようにさえ思えた。

ある朝、鏡の前で俺は愕然とした。

（だ、、、誰だ、、、？これ、、、俺か、、、？）

頬はこけ、目のまわりはどす黒くこけ落ちていた。

（怖い、、、俺が、俺でなくなるのか、、、？そうだ、、、薬だ、、、俺にはもつと薬が必要なんだ、、、）

追い詰められていく、、、その恐怖自体を俺は薬で紛らわすようになっていった。

警察にマークされるようになり、組織も徐々に、俺に薬を回さなくなつていった。

薬の量も必然的に減ってきた頃、汚いアパートの、薄暗くゴミ溜めのような部屋の隅にある破れたソファで、俺は深く腰掛けていた。

意識ははつきりしていたが、まるで部屋にある時計が突如早く回りだしたと思ったら次の瞬間には止まったままの状態になる。

時間に関する感覚がなくなっていくのと同時に記憶も曖昧になってくる。

もうオヤジとは10年も会っていないはずなのに、ついさっき、オヤジに叱られたような気がする、そんな感覚だった。

薬が底を尽きる恐怖で俺の両手は常に震えていた。

耳鳴りが始まりボサボサの頭を掻きむしりながら、その薄暗い部屋の中で時折、救急車のサイレンを真似たような奇声を発していた。

「ウィーンツ、、、ギャーンツ、、、」

幾分かでも、キーンという耳鳴りが誤魔化せた。

激しくなる耳鳴りを止めようと、ソファーに転がっていた空のウィスキーボトルを手に取り、目一杯、目の前の壁に投げつけた。

パリンツという音がやけに低くて、ゆっくりとした重たい音に聞こえた。

俺は頭を掻きながら、ゆっくりと、ソファーから重い腰を上げた。

そして、何気なくブラインドの一部を人差し指で押し下げた。

ブラインドはガチャガチャという金属音を立てて、白いレーザービームのような光をその薄暗い室内に打ち込んだ。

床に散乱していた割れたガラスが、キラキラと光り、ゴミ溜めのよ
うな部屋が一瞬宝石箱のように思えて、俺は目を細めた。

汚いベッドで横たわっているマネキンのように白い肌をした裸の女
に、その反射した光が揺らめき始めた。

女というより、まだ幼さの残る少女だった。

ぞつとして、ブラインドから手を離した。

呆然として、その場で立ち尽くしていた、。

（な、、なんだ、、誰だ、、こいつ、、？）

そして、その横たわる少女にそつと触れてみた。

冷たい果実のような肌触り、、まだ熟れきつてない冷えたマンゴ
ーのようだった。

天井を突き抜けて空に漂う雲を見つめているかのような眼差し、、
口元から流れた血は既に硬化して赤黒い錆びのように顎の辺りで広
がっていた。

俺は愕然として後ずさりをした、、そこに死体があるという事実
に愕然としたのではなくその死体自体の神々しさに愕然とした。

俺の人生で見てきた女の中で最も美しい女がそこにいた。長い間そ
の死体を無心に眺めていた。

どれ位そこに立ちつくしていただろう、、徐々に冷静さを取り戻
すにつれて、なぜここに少女の遺体があるのかをまた考え始めてい

た。

うつすらとした記憶を手繰り寄せるように俺は思考を巡らせた。

近所のコンビニの前で一人座り込んでタバコを吹かしていた少女、
、だった。

やさしく声をかけてやると直ぐについてきた。

そして、このベッドに腰掛けて夜遅くまで語り合った。

少女が家出をした理由、大嫌いな両親の事、学校の事、、俺は人生の先輩としてその少女の悩みを親身になって聞いてあげた。

そして夜更けになり、俺は少女の肩にゆっくりと手を回してやさしく呟いた。

「心配なくていい、、」

次の瞬間、少女の可愛らしく、あどけない眼が突如につり上がり俺を罵った。

「触るな汚いつ！何考えてんだこのエロオヤジ！」

その後の数分間の事はどうしても思い出せなかった。

朝起きて嫌な夢を見たが、内容は、、何も思い出せない、、、ちようどそんな感覚だった。

そして気が付くと俺とその少女は交わっていた。少女の奥深くまで

俺は挿入していた、。

少女は冷たくてまるで人形のようなようだった、？

その時、少女はまだ生きていたのか、？死んでいたのか、？それさえも分からなかった、。

ぼんやりとそのマネキンのように横たわる少女を見つめていた。

ふと我に返り、自分の片方の手をゆつくりと目の前に持ち上げた。

震える俺の手には血の混じった体液がこびり付いていた、。

汚れたズボンで両手を目一杯擦り、ベッドで上向きに横たわる少女を見つめたまま、立ちすくんだ。

「違う、、違う、、俺が、、俺が、、？」

ゆつくりと小刻みに震える手でポケットに入っていた、残り少ない白い粉を取り出した。

テーブルに転がっているアルミ箔に白い粉を置いてジッポライターに火を付けた。

カチンツという金属音が薄暗い部屋に鳴り響いた。

そして、その揺らめくジッポの火は、俺の手にこびり付いていた乾いた血液を、幻想的に照らしていた。

白い粉から浮かび上がる蒸気のような白い煙を吸い込むと、先ほど

まで感じていた恐怖が徐々に薄れていくのが分かった。

横たわる少女に近づき、ゆっくりと屈み込んで、宙を見つめる瞳の奥を覗き込んだ、。

吸い込まれるような瞳を見つめながら、俺の肺に溜め込んだ息をゆっくりと、吹きかけてみた。

刹那に、その少女は俺の曇った息の中で、この世で最も美しく無垢な笑顔を見せながら俺に微笑みかけてくれているように思えた。

俺は神にでもなったかのような高揚感で、その肉の塊をやさしく、この汚れた両手で抱き締めて、半開きで紫色の唇にキスをした、。

「ドンドントツ、、、ドンドントツ、、、」

突然玄関のドアを叩く音が聞こえた、。

誰っ誰だ、、、？誰だ誰だ誰だっ！

俺は怖くなってベッドに横たわる少女に荒々しく布団を掛けた。

「ドンドンドントツ、おいっ、ここを開けろっ！」

さらに玄関から聞こえてくる声は、俺を追い詰めていった、。

(や、、、やばい、、、)

（とにかく、、今は、逃げなければ、、。必要なモノだけを持つて、、）

俺はクローゼットに常においてあった組織から仕入れた拳銃をしっかりと握りしめて2階のバルコニーから飛び降りた。

俺は走っていた、、。

裸足で、ひたすらに走っていた。

振り向くと数十メートル後ろから制服姿の二人の男が追いかけて来ているのが見えた。

どれ位走っていただろう、、。

く、、苦しい、、もう、、もう、、走れない、、。

自分の足が自分の足でなくなっていくような感覚がしたその瞬間、俺は顔面からアスファストに、転げ落ちた。

まるで一塁にヘッドスライディングをした高校球児のように。

キキキーツー！！

曲がり角から物凄い音を立てながら滑るタイヤの音がした。

俺は音のする方へ顔を上げる。

ちょうど俺の顔面へ向けて煙を上げながら迫りくる黒いタイヤが見

えた。

恐怖が一瞬で俺を包み込んで目を閉じた。

（これで、、いいんだ、、）

（きつと人生つてこんもんなんだろうな、、。）

意外にも恐怖の中で俺はこんな風に思考していた。

タイヤのスリップ音が消えた。

痛みは、、ない、、。

一瞬だったからか、、？

俺はゆっくりと目を開けてみた。

黒い溝が目の前に見えた。

焼けた匂いが鼻を衝いた。そして、俺はぼんやりと考えた。

（生きてる、、。まだ、、）

ぼんやりとしていたが、振り返ると数人の制服姿の男達が数十メートル後ろで啞然として立ち止まっているのが見えた。

考える間もなく俺は必至で立ち上がった。しかし、体がまるでいうことを利かない。

「くそっ、、、くそくそ、、、何で生きてんだ俺は、、、。」

「おいっ、動くな!」

後ろで呆然としていた制服姿の男の一人が叫んだ。

動きたくても、、、動けそうもない、

目をつむってハンドルを握りしめている眼鏡をかけた男がフロントガラス越しに見えた。

俺はその黒い車のボンネットに手を付きながら運転席まで歩み寄って乱雑にドアを開け放った。

「ヒー、、、す、、、す、、、すみません、、、。」

眼鏡の男は頭を抱えるように運転席にうずくまった。

「すみませんで済むか、早く降りろ、バカ」

眼鏡の男は震える手でシートベルトを外す。

俺はその眼鏡の男の胸ぐらを掴んで引きずり出すように外へ放り出した。後ろで数人の男達の走り寄ってくる足音が聞こえた。

「おい、待てっ! 撃つぞっ!」

俺は咄嗟に運転席に乗り込み、同時に右足でアクセルを踏み込んだ。

パンッ、、、パンパンッ

銃声、、、？撃ったのか、、、？俺は撃たれたのか、、、？何、、、？
どう、、、なった、、、？

警察ドラマのワンシーンのように簡単には、当たらない、、、のか、
？

「ククククツ、、、。そうか、そうか、、、そんなもんだよな、、、。
」

俺は、バックミラーに映る銃を構えた制服姿の男達を見つめながら、
胸ポケットからクシャクシャのタバコを出して火を付けた。

そして、満足げに深く肺に吸い込んで、アクセルを踏んでいる右足
に更に力を入れた。

吐き出した煙が車内に充満していく、、、その煙越しに、俺はフロ
ントガラスから見える青空をぼんやりと見つめていた。

（とにかく、、、逃げよう、、、）

（とりあえず、、、金が必要、、、薬を買う金が、、、）

気が付くと、ぼんやりとした、、、現実なのか、、、夢なのか、、、
分からない状態で俺はそこに立っていた。

ついさっきまで車を運転していた、、、確かそうだった、、、。

そして、車の中にあつた大き目の袋の中に例のモノだけを入れてと
にかくここに来た記憶だけは辿る事が出来た。

スーツ姿の一人の男が、俺に歩み寄り、まるで小汚い浮浪者でも見るような目で俺を睨み付けた後、頭の中に書かれた文章を面倒臭そうに棒読みした。

「いらつしやいませ、お客様。本日はいかがなさいましたか？」

その男のやけにリアルな声が俺の脳みその中心を刺激して、そこからドロドロの液体が脳全体へ向けて、プシュ、プシュと吐き出された。

そして、俺は呟いていた。

「金がある、、、」

今この瞬間が夢なのか現実なのか、、、もう、どうでもよくなっていた。

俺はゆっくりと大きめの袋の中にあるモノを探し始めた。

その男は引き攣った半笑いの顔で俺の麻袋に突っ込んでいた腕を力一杯に掴んで俺の耳元で囁いた。

「やめとけ、、、気遣いつ、、、。どうせ何も出来ないんだから、、ラストチャンス、、やるよ。

その手に持つてるモノをゆっくり離せ。」

半笑いのその男の顔は、、、何か見覚えがあった。

（誰だったっけ、、、？この顔、、、どこかで見た、、、）

（確かに見覚えがある、、、）

（そうだった、、、昔、顔面を拭き飛ばしてやったガマガエルの顔だ。）

（きつとあのガマガエルだ。懐かしいな、、、ブツブツでボタツしたその醜い頬、、、）

（俺を覗きこみながら、ニタニタした余裕の表情のガマガエルめ、、、）

（そうそう、、、そうだった、、、確か、、、大きく腕を振りかぶって、川の向こうまで届くように、、、投げ降ろすっ、、、。）

ドスンッ、ビチャッ！

大きな音が鳴り響いた。

そして永遠にこの静けさは続くのかと思える程に、その空間は無音で、時間が止まっているかのようにだった。

俺の目の前にある白い壁には懐かしい模様が描かれていた。ピクピクと痙攣して横たわる顔のないガマガエル、、、。

（デ、ジャ、ブー、、、か？）

（このストローで吹いたようなこの模様、、、確かどこかで、、、見た事あるぞ、、、）

まるでタイムマシンに乗って、あの頃に帰れた気がしてならなかった。

懐かしくて切ない少年時代、、、。

その横たわる胴体は、ガマガエルのそれにゆっくりと変形して俺の足をピョンピョンと飛び跳ねているように感じられた。

壁に描かれた模様を、ゆっくりと、噛みしめるように、手で撫でまわした後、張り付いていた目玉をゆっくりと剥がした。

そして、あの頃と同じように、口に放り込んだ。

奥歯でしっかりと固定して顎に力を込めるとピュツという音を立てて、ほろ苦い液体が俺の口の中に飛び散った。

（あの頃と同じだ、、、こんな味だった、、、）

しかし、、、タイムマシンでの旅は長くは続かなかった。

「ギャー」という女の叫び声を皮切りに騒々しくてうるさい現実にあつという間に引き戻された。

俺は現在に戻された事が無性に忌わしく思え、大穴の開いた袋からそれを引っ張りだして、一番わめきたてて、入口に向かって走っていた女目掛けて撃ち抜いた。

「うるせえ、クソアマっ！」

ズドンッ

女は吹っ飛んだ。

ガラスのガチャーンという激しい音がその空間に鳴り響いた。

女は香港映画のワイヤーアクションのように、ガラスを割って向こう側の地面に落下した。そして、あのマネキン少女のように動けなくなった。

また、静けさが戻り、時間が止まった。

いくらか俺のイライラした気持ちも安らいだ。

（そうか、、、この引き金を引くといつでも時間は止まってくれるのか、、、）

（時間が止まっている間にゆっくりとこれから俺がしなくてはいけない事を考えればいいか、、、）

銃と大きな袋を持った男は、まるでガムを噛むように口の中で目玉を転がしていた。

そして、ニヤついた表情で銃口から流れ出る煙を少しの間見つめていた。

第9章 強 盗（前書き）

鍵穴で起こっている現象が前章の中で起こった現象とオーバーラップしてくる。

第9章 強 盗

何もない、、この薄暗い空間の隅で、俺は自分の汚い剥がれた爪を口の中に放り込み、右から左へ、左から右へと舌で転がしていた。長い間、口の中に何か入れるという行為をしていなかったためか、何か新鮮な感覚がして気分が晴れた。もしかしたら、俺の記憶が断片的にしかないだけなのかもしれないが、、。

その行為は、自分の口から発せられたあの「死ね」という忌まわしい言葉の事や、鍵穴の中での世界に関する疑問の事などを忘れさせてくれた。

舌に自分の爪が当たる感触が段々と気持ちよくなってきて、ずっと転がしていても全く飽きがこなかった。

時折その爪が、奥歯に当たってカチンツという小さな音を立てた。

無心に口の中で爪を転がしている内に、何か不思議な感触が口の中で生まれ始めていた。

カチンツという音を立てる度にその爪が少しずつ、口の中で大きくなっているような、、

そんな可笑しい感覚がしてきた。

更に意識を口の中に集中させていくと、まるで今俺が佇^{たたず}んでいるこの薄暗い空間自体が、俺の口の中であるような、不思議な錯覚に陥

っていった。

また、、また何か訳の分からない事が始まるのか、、？

これは、、これは俺の腐った脳みそが創り出した馬鹿げた幻覚なんだ、、そうだ、、きつと
そうに違いない、、。

空間は瞬時に暗くなった。

そして、俺の口の中にあるはずの爪がこの暗い空間の中で異様な光りを放って俺の目の前に浮かび上がる。

その爪は、この閉ざされた空間の中で右へ左へと移動し始めた。

そいつは側面の壁に当たる度にカチンツという金属音を立てては一回り大きくなっていく。

なんだか間抜けな形をしたそいつは、まるで空中で反復横飛びをしているようだった。

う、、うそだろ、、此処は俺の口の中、、？馬鹿げた幻覚だ、、馬鹿げてる、、馬鹿げてる、、。

そいつの横飛びを目で追っていた。

どんどん巨大化していくそいつに俺は押し潰されそうになり、突如恐怖が芽生えた、、。

やめろ、やめろ、消えろ、消えろ、、ここは、、ここは俺の口

の中じゃないんだぞ、、、そう
だ、違う違う、、、、。

この目の前で起っている現象、、、幻覚、錯覚、を止めるために俺
は自分に言い聞かせていた。しかし、そいつは俺の叫びを無視する
かのように反復横飛びのスピードを上げていった。

カチンツ、ドン、ドン、カチンツ、ドン、ドン、カチンツ、ドン、
ドン、、、、。

スピードが増す度に、その音の間隔が段々と早くなり始めた。

や、やばい、、、、と、、止められない、、、もうこいつは止まら
ない、、、、。

だ、誰か、、止めてくれ、、潰される！

俺は腹の底から叫んだ、、、、。

「消えろっ」

ドスンッ

鈍い音が空間に反響した。

そして何事もなかったかのように、いつもと変わらない閉ざされた

空間が俺の目の前にはあった。

俺は大きく息を吸い込んだ、。

「な、何だったんだ、」

恐くなって口の中から爪を思いっきり吐き出した。ペツという音と共に真っ白に磨かれた爪が飛び出して鍵穴の下へ、カチツカチカチと音を立てながら転がっていった。

鍵穴の下真っ白に光るそいつを見つめていると、騒がしい雑踏の音、悲鳴、そして、すすり泣く声が、その鍵穴から聞こえてきた。

何だ、？

鍵穴の中でまた何か起っている、のか、？

俺は、鍵穴まで四つん這いの状態で這った。鍵穴の中で起っている何かを確かめる為に、ゴクリと唾を飲み込み、鍵穴にゆっくりと目を近づけた。

ドスンッ！

ガチャーンー！

その激しい音で、四つん這いの状態の俺は、ビクンツと体を揺り動かして、声を上げた。

「ギャッ」

鍵穴から何か飛び出して俺の目に刺さっているのではないかと思ひ、左の手で右の瞼を大きく広げて、右の人指し指をゆつくりと眼球の黒い部分に押し付けた。

大丈夫、、大丈夫だ、、何も刺さってない、、。

ホツと胸を撫で降ろした。

今度は、しっかりと四つん這いになった両手、両膝に力を入れて、鍵穴をじつくりと覗き込んだ。

・・・遠くで割れたガラス越しに、女が血まみれになってうつ伏せの状態で倒れているのが見えた。

辺りにはガラスの破片が散乱していた。

一本の尖ったガラスの破片がその女の後ろの首の部分につきささり、プシュ、プシュとクジラが塩を吹くようにドス黒い血が噴き出していた。

ブラウス、スカートが真っ赤に染まり、渋い赤のドレスにキラキラ光る無数のガラスが散りばめられた、スワロフスキーのようだった。

今までにみたどのドレスよりも美しいと俺には思えた。

何だ、、？何が起っているんだ、、？

俺は鍵穴の中で繰り広げられている惨劇に目を疑った。

有り得ない、、有り得ないぞ、、こんなこと、、。

嘘だ嘘だ嘘だ、、、こんな事が鍵穴の向こうで起こるはずがないだろ、、誰か、、誰か、、と、、とにかく、、早く警察に連絡しなくては、、大変なことが起っているぞ。。。

今まで覗いてきたどの光景よりも、悲惨で衝撃的な光景に俺の心臓は爆発しそうな程に、激しく動き始めていた。

そこでは、大勢の人が恐怖に怯えた表情でしゃがみ込んでいる。

女性の押し殺すように、すすり泣く声だけが聞こえていた。通りを走る車の騒音など、そこにはまったく聞こえてこなかった。

立て続けにドンツドンツという鈍い音が2回鳴り響き、音がどこから聞こえているのかを目で追った。

一人の男がカウンターの上に上がって、奥に座る女性の髪の毛を引っ張りながら何か怒鳴っている。

「金を袋に入れろ！」

「死にたくなければ全員しゃがんで動くなよ！」

男の片手には銃が握られている。

二人のガードマンがカウンターに隠れるように、しゃがみながら近づいているのが見えた。

その内の一人のガードマンが男の真下まで辿り着いたと思った瞬間、その男の足を掴み、引っ張り降ろそうとした。

鍵穴を覗く俺は、思わず声に出して叫んでいた。

「よし、落とせっ!」

カウンターの上の銃を持った男はバランスを崩し倒れそうになりながらも、ガードマンの顔面めがけて近距離から引き金を弾いた。

俺は鍵穴を覗きながら思わず叫んでいた。

「やめろっ、馬鹿っこのクソ気違いがっ!」

俺の声も届かず、大きな銃声と、肉と骨が弾け飛ぶ音が鳴り響いた。

バンッ!

ブジャ!

ガードマンの顔面が吹き飛ぶのが一瞬見えた。

俺は鍵穴から目を逸らした。

「ウソ、、、だろ、、。これ、、、現実なのか、、?」

俺は呟いた。そして、またゆっくりと鍵穴を覗きこんだ。

首から上が吹き飛んだ状態のまま、その胴体はカウンターの上にいる男に向かって、手をバタつかせている。

男はその胴体を蹴り飛ばして言った。

「キモイんだよッ！」

ピクピクと痙攣している倒れた胴体部分の横で失禁して、膝を着いて震えているもう一人のガードマン。

男はカウンターから飛び降りて、そのもう一人のガードマンの額に、銃口を押しつけて呟いた。

「おい、、、しゃがんでろっていったよな、、、？」

震えながら、首を縦にゆっくりと振るガードマン。

「た、助けてくれ、、、子供が昨日産まれたんだ、、、俺、、、なつ、分かるよな、、、分かってくれるよな、、、？。」

震える声でなんとか自分の声を喉の奥から絞り出すガードマン。

「あー、、、分かるよ、分かる、、、。もちろん解放してやる、、、。」

鍵穴を覗きこむ俺は、恐怖で震えながら呟いていた。

「ヤメロヤメロヤメロヤメロ、、、ヤーマーロークソ気違いっ！」

ドンッ！

銃声と同時に、ガードマンの後頭部から脳ミソの破片が白いカウンターに、吹き飛ぶのが見えた。

鍵穴を覗いていた俺の体の震えはピークに達し、膝がガタガタと震えていた。

「怖い、、怖い、、怖いよ、あいつ、、。どうなってんだよ、、誰か、、助けを呼ばないと、、また殺すぞ、、あいつ、、」

俺の意識に関係なく、まるで蛇口をひねって水がドボドボと流れ出るように、小便が垂れ流れ、鍵穴の下のコンクリートが水浸しになっていった。

鍵穴の中では、額に大穴が開き、後頭部がなくなっているガードマンが両膝をついたままの状態で息絶えていた。

その撃たれたガードマンは何が起こったのか分かっていないかのように、目は見開き、涙を流して遠くを見つめていた。

男は腰を屈めてガードマンの耳元で呟いた。

「解放してあげただろ、、。この世界から、、」

男は、カウンターに赤黒く飛び散った脳の一部を片方の手の人差し指で拭って、アイスクリームでもしゃぶるように口に含んだ。男は口の中に含んだ脳みその味を十分堪能出来るように、小刻みに首を揺する。

両膝を付いて遠くを見ていたガードマンは、その男の後ろでバタンツと音を立てて崩れ落ちた。男は首を揺すりながら、ゆっくりと振り返った。ニヤニヤした顔つきの口元からスーッと赤い血の筋が垂れるのが見えた。

俺は、一瞬その男と目が合ったような気がして、思わず恐怖で鍵穴から目を逸らした、。

鬼だ、、鬼がいる、、。

あの鬼を、、なんとかしなければ、、鍵穴のこちら側にいる俺に何か出来ることはないのか、、？

俺は思考を巡らせながら、また鍵穴を覗いた。

カウンターに座る女性は嗚咽しながら、涙と鼻水にまみれ、必至で口に手を当てている。

男は、その女性に再度目を向けて大声で叫んだ。

「てめえっ、金入れたのかっ？」

ビクッと女性の体が痙攣したと同時に、口元に垂れていた大粒の鼻水がデスクの上に飛び散るのが見えた。

その女性は、また足元の金庫から、札束を袋へ入れる作業を始めた。

「早くしろよ、このドン臭いメス豚がっ　！」

明らかにイライラしているその男は、少し待った後、女性からその袋を乱暴に奪い取り、割れていた窓へ向かって走り出した。

外では急ブレーキをかける音がして、数人の制服姿の男達が、その車から飛び出してきて拳銃を構えるのが見えた。

俺は鍵穴に口を目一杯に付き当て、その制服姿の男達に聞こえるよ

うに叫んだ。

「撃てーっ、、、その鬼を撃ち殺せー、早く、早く、逃げ出すぞーっ!」

男は路駐してあった黒い車に飛び乗ろうと、割れたガラスの向こうの歩道へと飛び出して行った。

制服姿の男達は、一斉に走っていく男めがけて銃を発射した。

バンツ、バンバンバンツ。

軽くて乾いた音が割れたガラスの開口部からその空間へ入り込み、ゆっくりと何重にも反響していった。

次の瞬間、男は腹部を押さえながら、バランスを崩し、前のめりに転げ、倒れていた血まみれの女性の真上へ倒れ込んだ。

ブチャツ、、、

肉と肉がぶつかる鈍い音が聞こえた。

女性の血で真っ赤になったその男は、腹部を押さえながらその場でイグアナのようなポーズで銃を構える制服姿の男達を睨みつけていた。

鍵穴を覗きこみながら、俺は叫んだ。

「やったっ、、、やったっ、、、当たったのか、、、殺したか、その気違い鬼をつ、、、。」

その瞬間、鍵穴を覗いていた俺自身の腹部にズキツという重い痛みが走り、鍵穴から目を離した。

な、、何だ、、この痛み、、何だ、、？

ゆっくりと自分のボロボロの衣類をたくしあげて自分の腹を覗き込んで見た。

腹部に銃で撃たれたような丸い傷跡があった。

思考が一瞬止まり、額から吹き出た汗が、ポタツポタツと床に落ちていく状況がスローモーションのように見えた。

「う、、そ、、うそだつ、、。。何だこの丸っこいキズは、、。いや、、違う、、違う、、偶然だ、、そう、、偶然に違いないんだ、、。」

何も考えたくなかった、、

違う違う違う違う、、俺じゃない、俺じゃない、俺じゃない、、

ガードマンの頭が吹き飛ぶ光景が目をつむると自然に浮かんできた。脳みそのかけら一つ一つの形が、、文字に見えてくる。

「お」「ま」「え」「お」「ま」「え」「お」「ま」「ま」「え」

違う違う違う違う、、ち、、が、、う、、

怖くなって目を開けると壁に染み付いた血、キズ、汚れまでが文字に見えてくる。

「お」「ま」「え」「お」「ま」「え」「お」「ま」「え」「こ」
「ろ」「し」「た」

違う違う違う違う、、ち、、が、、う、、うわぁ。

眼球を指で押さえ付けて放すと少しの間だが、視界が真っ黒になって、文字が現れるのが止んだ。

そう、違うんだ、、違うんだから、もう出てくるな、、出てくるな、、。

眼球を押さえる行為を何回か繰り返しているうちに真っ黒の視界が徐々に赤黒くなってきた。自分の感情からくる涙なのか、、指で眼球を押さえつけることによる生理的で物理的な涙なのか、、分からない、、。

ただ、、床面にポタツポタツという音を立てて、赤黒い血の涙が頬を伝って落ちていくのを震えながら、ずっと見ていた。

「俺じゃない、、俺じゃない、、。こ、、怖い、、だ、誰か、、助けて、、下さい、、。」

第10章 三途（前書き）

三途の川に飲み込まれる。

自分が殺めてきた人達、、。

自分の父親に対する気持ち、、。

そして、記憶は消えてゆく。

第10章 三途

誰かが俺の右の瞼をこじ開けたと同時に真白な光が入り込み、目玉に激痛が走った。

今度は左の目に強い光が入り込み、同じように激痛が走った。

室内に響くピツ、、、ピツ、、、ピツ、、、という電気音。

誰か、、、誰かがそこにいた。

そして、何か話をしているようだった。

目に激痛が走り、しっかりと目を開ける事が出来なかったが、ぼんやりと、、、

一人は白衣、もう一人は黒い制服を着ているのが分かった。

体を動かそうとしたが、何かに固定されているのか、、、もしくは俺が単に動けないのか、、、分からなかったが、とにかく体を動かす事が出来なかった。

全身に激しい痛みが走り、頭がグルグルと回り始め、吐き気を催した。

ヒリヒリと痛む顔面には何か巻かれているようで、鼻から息をする際に違和感があった。

俺が目覚めたのが分かったのか、白衣の男は、ゆっくりと俺に近づ

き、屈み込んで俺の顔面を凝視した。

その後、手元の紙に何かメモを取っているようだった。

俺はその白衣の男に問いかけた。

「お、、、い、、、俺は、事故で、あの車の事故で、死んだら、、、、？ここは、地獄か、、、？」

白衣の男はまた屈みこんで、ゆっくりと俺の耳元で囁いた。

「あー、、、そんなとこだな、、、。お前はひしゃげた車の中から引つ張り出されて、今は地獄の3丁目つてとこだよ、、、。ちょうどこれからお前の指を一本ずつ切り落とすとこだ、、、プップププッ、、、。」

気持の悪い笑いを堪えながら、そいつは俺のこめかみの部分に、持っていた何かの先をグリグリと押し付けた。

同時に激しい痛みがまた襲ってきて、俺の目の前が真っ白になっていった。

あの気持ちの悪い笑い声と、コツンツコツンツという足音が遠くに聞こえた。

深い深い眠りから覚めたような感覚だった。

ゆっくりと体を起こすと俺の目の前には大きな川が流れていた。

向こう岸には美しい花畑が見え、俺の心は晴れ渡った青空のようだった。

遂にきたのか、、？ やつとこの時がきてくれたのか、、？

俺は嬉しくて飛び上がりそうになる気持ちを抑え、起き上がり、川に向かってゆつくりと歩き始めた。

向こうで手を振る人々の姿が見え、駆け足で川へ入り始めた。

俺も笑顔で彼らに手を振り返した時、向こう岸で手を振っている人々が、何か俺に叫んでいるように聞こえた。

膝まで川に浸かった状態で耳を澄まして、手を振っている彼らを凝視した。

「おーいー、逃げろー、早く川から出ろー！」

ハッとして自分の足元を見た。

あんなに青くキラキラ輝いていた川は赤黒く染まっていた。

手を振っていた人々も、よく見ると片足がなかったり、首が無かったり、腕がなかったりと、まるでゾンビ映画のワンシーンのようだった。

一瞬背筋に虫が這ったようなゾワゾワとした感覚を覚え、即座に振り返り、引き返そうとした。

足がズブズブと川底の泥に絡みついた、。

もがけばもがくほどにその泥は俺を飲み込んでいった。

や、、、やばい、、。

何か捉まるものがないかと、子供が駄々をこねるように必死で両手を振り回していた。

岸边までの距離が果てしなく遠くに見えた瞬間、足元に流れる血の川が、恐怖で異常に冷たく感じ始めた。

体はブルブルと震え始め、鎧をまとっているように重たくなり、思い通りに動かなくなっていた。

怖い、、寒い、、また、あの事故の時みたいに、、沈んでいくのか、、？

どんどんと加速して沈んでいく俺の体、。

既に上を向いていないと赤黒い血が俺を飲み込んでしまうところまで来ていた。

ガチガチという俺の歯が噛み合う音が血の川の中を反響して耳に伝わってきた。

溺れる、、溺れる、、この三途の川に飲み込まれる、、。

諦めかけた時、俺の右の手が何かに当たり、咄嗟に掴んだ。

止まつ、、た、、助かった、、。

青空に浮かぶ入道雲の上を不気味な数匹の黒いカラスが通り過ぎて行くのが見え、ブルツと俺の体が反応した。

「気持ちの悪いカラスめ、、」

血の川の中で響き渡るガチガチという俺の歯が噛み合う音が、血が流れるザァーという音の中で聞こえていた。

この震えがおさまるのを待たなくては、、そう、、冷静に、、冷静になれば何てことない、、。

俺は気持ちを幾分でも落ち着かせるために、そして、恐怖を誤魔化すために、入道雲に向かってタドタドしい口調で歌い始めた。

「ドングリ、、コロ、、コロ、、ドン、、グリコー、お池に、、はまってさぁー大変、、。」

耳に伝わってくるガチガチという音が徐々に小さくなっていくのが分かった。

少し安心して、俺の掴んでいるものをしっかりと握り直しておこう

と思った。

その瞬間、それが、、俺が掴んでいるそのモノが動いたような気がした。

そして、一瞬入道雲の隅に黒い影が通ったような気がした。

なんだ、、なんだ、、なんかいるのか、、？

掴んでいる手にしつかりと意識を集中させた。

何か柔らかい、、この感触、、動いたつ、、？

確かに、、動いた。

掴んでいる何かが俺に向かってジワジワと動き始めた。

そして、ガチガチという俺の歯が噛み合う音がまた大きく聞こえ始めた。

俺は震える声で叫んだ。

「だっ誰だっ？、、、、聞こえてんのか、、、、？クソ気持ち悪い、趣味悪すぎだぞっ！」

掴んでいたそれがさらに近づき、右斜め上の雲の隅から、ゆっくりと誰かが俺を覗きこんだ。

そして、ニヤニヤと俺の顔を見ている。

年配の男だった。

「おっさん誰だよ、、気持ち悪い、、趣味悪いんだよ、早く引っ張り上げてくれ、、な、、。」

俺の鼻の頭にポタポタと冷たい何かが落ちてきた。

「何だ、、おい、、おっさん何か落ちてきたぞ、、。」

俺はその正体を探すために目を凝らしてその男の顔を凝視した。

男の額に開いた大きな穴から青空に浮かぶ入道雲が、右から左へと動いていくのがしつかりと見えた。

ガチガチという音がより一層激しく血の中を反響し始めた。

強大な恐れが俺の泥に埋まった体から噴き出してくるのが分かった。

「ウ、、ウソだろ、、まさか、、まさかまさか？」

ガチガチという音以外に血の中をジュボーン、、ジュボーンと誰かが歩いてくる音が聞こえてきた。

俺のうるたえる表情が伝わったのか額に大穴を開けた男はより一層、ニヤつき始めた。

「クククツ、、ククツ、、。」

数人の足音がこちらに向かって、更に大きくなってきた。

ジュボーン、、、ジュボーン、、、ジュボーン、、、

「嫌だ、、、嫌だ嫌だ、、、ジュボーンって、、、嫌だー、許して、
、許して、、、下さい、、、。」

俺は子供のように泣き叫んでいた、、、。

入道雲を中心にして、別の人影達が俺の視界にゆっくりと入ってくる。

頭が吹き飛ばされたガードマンの胴体、ガラスの散りばめられた赤いドレスの女、、、白粉を塗ったような真っ白な裸の少女、、、。

あまりの恐怖に、俺は彼らの笑顔に合わせるように、泣きながらではあったが、精一杯の笑顔を作って見せた。

「ハハッ、、、ハハハハッ、、、。」

瞼の辺りがピクピクと痙攣を起こし、歯はガチガチと音を立てていた。

急に掴んでいる手に力が入らなくなり、ゆっくりと沈んでいった、ズブズブ、、、。

揺れる血の川を通して彼らが腹を抱えて笑っているのがうつすらと

見えた。

赤い揺れるフィルター越しに、楽しそうに笑っている彼らが、どんどん小さくなって行き、そして、消えた、、、。

、、汚い泥が俺の口の中に入ってきて舌にザラザラとした感触がした、、、。

苦しい、、苦しい、、俺の体の中が泥で埋め尽くされていく、、。

誰か、、誰か、、。

最後の力を振り絞って、泥の中で、必死で体を動かそうとしていた。そのうち、バタつかせていた足が、泥の底の底を突き破った感覚がした。

泥の底が空洞になっているようだった。

腰の部分まで空洞に出て、一層足をバタつかせる勢いを強めた。

そして、空洞の部分へどんどん俺の体は抜け出していった。

もう少し、もう少しで、顔が空洞部分まで出る、、そうすれば、息が出来る、、。

バタつかせている足は必至で着地する場所を探していたが、一向に何かに当たる気配はなかった。

何だ、、どこに出るんだ、、？

徐々に、このまま抜けきってしまったらどこかに落ちてしまうのではという不安も感じていたが、とにかく口の中に入った泥を吐き出したかった。

そして、新鮮な空気を目一杯に吸い込みたくて、必至で体中を動かしていた。

最後に、俺の顔が空洞の部分に出た瞬間に、案の定落ちて行った。

虚しく、儚く落ちて行った。

どこにも、？まる場所はないと一瞬で把握出来たが、藁をも掴む気持ちで、両手を精一杯に振り回していた。

どこまで落ちていくのだろう、、？このまま、まさしく地獄の果てまで落ちていくのか、、？

恐怖で全身が固まり、目をつむった状態で落ちていった。

まるでB級サスペンスドラマの中で崖から落ちていく人形のように空中を落下していった。

落下していくスピードが重力に逆らって徐々に遅くなっていく感じがして、ゆっくりと目を開けてみた。

「な、、なんだ、、これ、、」

緑が一面に広がっていた。

緑の大草原がスカイブルーの空に包まれていた。

いつか夢でみた光景のように、懐かしささえ感じられた。

空中で体を動かそうとするが、うまく動かない。

しかし、段々と空中で体を動かす事に慣れてきて、自由に空を飛んでいるような気分になれた。

同時に、血の川に溺れていた時のような荒々しくて、恐怖で息苦しくなるような気持ちはなくなり、この目の前に広がる緑のように至極穏やかで、晴れやかな気持ちになっていった。

空を泳ぎながらその草原にゆっくりと着地した。

俺は、ここがどこかも分からず、どうすればいいかも分からないまま、とにかく果てしなく広がる大草原を、歩き始めた。

俺は何処に向かっているのだろうか？

そんな疑問を抱きながらも、この草原を歩き続ける事が自分の使命であると、何となく感じていた。

一步一步踏みしめながら、歩く度に自分の過去が甦っていくような不思議な感覚だった。

人生で最も頭が冴えているような、とてつもなくすっきりとした気分だった。

過去の一瞬一瞬のイメージまで容易に思い出す事が出来た。

そして、いつしか、この草原を歩きながら、自分自身と向き合っていた。

草原のずっとずっと向こうにもう一人の自分の後ろ姿が見えて、それをゆっくりと追いかけているような、そんな感覚だった。

今まで、俺は何人の人を殺めてきたのだろう。

俺は許されるのか？

到底許されないだろう。

常に矢印を自分には向けなかった。

誰かに矢印を向けて、自分は悪くないのだと信じて疑わなかった。

社会が悪いんだ、、オヤジが悪いんだ、、あいつが悪いんだ、、。

俺は悪くないんだ、、。

そうやって生きてきた。

だから、、だから、、奴らを殺した、、。

そう、、しょうがなかったんだ、、。

俺が殺してきた奴らを、愛して止まなかった人々はいたのだろうか？

そして、彼らは今どうしているのだろうか？

俺みたいな気違いに遭遇してしまい殺されてしまった彼らを哀れに思うだろうか、、？

俺を憎んで止まないだろうか、、？

愛する人を殺される苦しみとはどのようなものなのだろう、、？

そもそも俺自身は誰かに愛された事があったのだろうか、、？

草原を歩きながら、自問自答は続いた。

そして、俺は、草原の遥か向こうに見える人影を見つめ、^{つばや}呟いていた。

「オヤジ、、？父さん、、？」

全ての答えに通ずる何かが、頭の奥の方でフラッシュしたように感じた。

そう、そういえば、あの時オヤジを殴りつけて、「死ね」と罵った

時、倒れたオヤジのポケットから滑り落ちていく黒の財布が見えた。
財布の見開きの部分に、俺が小学校の入学式の時の写真が入っているのが見えた。

その写真の中には、オヤジの横で、楽しそうに笑っている幼くて、無邪気な俺がいた。

それを見た瞬間、自分の中で何かが破裂したように感じた。

そして、そこから湧き出してくる感情、、、自分がオヤジにしてしまった取り返しのつかない行為に対する後悔の気持ち、、、どうやって抑えたらいいのか分からなかった、、、。

どうすることも出来ずに、とにかくその場から逃げ出した。

あの時、感情を抑える必要なんてなかったんじゃないか、、、オヤジの前で、仲間の前で、その感情を爆発させれば良かったんだ、、、。

格好悪い俺をさらけ出してしまえばよかったんだ。

ただ、その場で大好きなオヤジに抱きついて涙が枯れるまで泣けば、それで良かったんだ、、、。

ただ泣くという、単純で、動物的で、原始的な行為が、時として全てを正しい道へと導いてくれる、、、。

今まで考えた事のないような思考が俺の頭の中を駆け巡っていた。

そういえば、オヤジは、何度も何度も俺を警察に迎えに来てくれた。

「さあ、帰るぞ、、、。」

いつも一言だけ、そう言っただけでオヤジは俺を連れて帰ってくれた。

その時のオヤジの目は、、いつも真っ赤だった。

泣き腫らした目だった。

オヤジは俺には弱い部分を見せなかった。

いつまでも強いオヤジでいたかったんだろう。

でもオヤジの部屋から、漏れてきた泣き声、、俺は分かっていた。

オヤジはいつも、自分自身を責めていた。

俺がこうなったのは自分の責任だって、ずっと、ずっと責め続けていたのを俺は知っていた。

そう分かっていたんだ、、。

今更どうしようもないのは分かっていたが、とにかくこの気持ちをおヤジに伝えたいと痛切に思い、この俺が今歩いている大草原へ向かって叫んでいた。

「オヤジ、、、違う、、、違うよ、、、オヤジのせいじゃないんだ、
、誰の責任でもない、これは、俺自身の責任なんだよ、、、。だ
から、、、だから、、、」

俺はその後の言葉に詰まり、ただ子供のように泣いた。

俺はオヤジの事を愛している。

誰よりも大切なのはオヤジだ。

オヤジも俺を愛してくれていた。

誰よりも愛してくれていた。

俺がどんなに悪い人間であろうとも、その気持ちは一遍も変わるこ
とはなかった。

ただ、俺のこの気持ちをどうやってオヤジに伝えればいいのか、、
、その時の俺には分からな
かった、、。

もしも、、もしも、オヤジがどこかの気違いにでも殺されたなら、
俺はそいつを極限まで苦しめて殺してやりたい。

そして、そいつの苦痛に歪む表情をじつくりと見てやりたい、、。

オヤジが殺されたなら、、？

そんなことはもう考えなくなかった、、考えるだけで、胸が苦し
くなり、吐き気がした。

オヤジがたとえ年老いて、痴呆になり、俺の事が分からなくなつて
も、きっと俺はオヤジを愛おしいと思うだろう。

オヤジのオムツを換えてあげたいと思うだろう。

徘徊していなくなってしまったとしたならば、、どんな事をして
でも探し出して、抱き
しめて、

「さあ、帰ろうっ」

と、一言だけ言って連れて帰ってあげるだろう。

オヤジが俺にしてくれていたように、、。

どんなにオヤジに無視され続けたとしても、どんな仕打ちを受けた
としても、愛おしいと思えるだろう、、。

オヤジはたった一人の家族、俺を無償の愛で育ててくれた人だから、
、、。

そんな、、そんなかけがえのない命を。

彼らにとって、この地球上で、この宇宙で、たった一つだけの命を、俺は奪ってきた、、、。

いとも簡単に、あっさりと、一瞬で、何事もなかったかのように、、、。

自分の欲求のままに、自分の中の鬼を解放して、食い殺した、、、。

許されない、、、俺は許されるはずもない、、、。

1億年、宇宙空間を一人きりで彷徨い続け、許しを乞うたとしても許されない。

自分の命を1億個捧げる事が出来たとしても、決して許されない。

俺は深く、深く自分を見つめていた。

何回も何千回も同じ質問を繰り返して問うた。

そして、、、絶対に許されないという結論に何回も何回も辿り着いた。

こんなにも広くて何百もの草花があり、様々な景色がある草原なのに、辿り着く場所はいつも同じだった。

俺は、広大な草原の中にポツンとある「決して許されない」という名の場所に、必ず辿り着いた。

草原の中を、いつしか俺は走り始めていた。

どんなに走っても、走っても疲れは襲ってこない、まさしくランナーズハイの状態であつた。

自分を見つめているうちに、とめどなく涙が溢れ出る、、、。

顔を涙でグチャグチャにしながらも走り続けた。

「許されたい、、、許されたい、、、」

俺は呟きながら走っていた。

どれ位走っていただろう、、、何年間何千年間も走っていたかのような感覚だつた。

ふと気付くと草原の向こうに広がる地平線に一点の光が見えた。

その光は、近づくにつれて、どんどん大きくなってきた。

俺はその大きな光の玉の正面で立ち止まった。

その光を見ていると不思議と心が和んだ。

ゆっくりとその光を触ると温かい、お湯の塊のようだった。

手を放そうとすると液体が手に吸いついて、ピチャツと音を立てて離れる。

その瞬間に、石を投げ入れた水面のように綺麗な波紋を作って、その波紋が玉全体へ広がっていった。

俺はごく自然にその光の玉の中に、ゆっくりと入っていった。

恐怖や恐れもなく、ある意味で使命感のようなものが芽生えていた。

「その玉に入るために俺は生れてきたんだ」と、不思議とそういう気持ちになっていた。

体が玉の中に入っていくにつれて、温かい液体がゆっくりと俺の肺を埋め尽くしていった。

その温かい液体は生きていくために必要とする酸素や栄養分全てが含まれているように思えた。

そして、俺の全てを、やさしく包み込んでくれた。

徐々に俺の体は軽くなり、宙に浮き始め、玉の中央にフワフワと浮かんでいた。

そこは、苦しみもなく、澄んでいて、嘘偽り、裏切りもない真っ白な世界だった。

この後、俺はどうなっていくのだろうかという不安さえ生まれてこなかった。

ずっと、その玉の中で浮かんでいた、そして、草原を走りながら自分を見つめ直していた事を考えながら、ごく自然に願い始めて

いた。

許されない、、、そう、俺がしてきた事は決して許されることはないだろう、、、でも俺が殺めてきた人々が、またこの地球上に生まれてきて、幸せな人生を歩んで欲しい、、、。

そして、もう一度だけ、、、一瞬だけでも構わない、、、あの人に会いたい、、、この溢れてくる
気持ちをあの人に伝えたい、、、そう祈っていた。

俺自身が救われようとは、決して思わない。

あの人に、この気持ちを伝えることが出来るなら、どんな苦しみ、苦痛、困難、痛み、悲しみ、絶望、、、全ての苦難に身を委ねる事が出来る。

「父さん、、、会いたいよ、、、、。会いたいよ、、、。」

そう呟いた瞬間、パンツつぶやという大きな音を立てて、玉が水しぶきをあげて弾け飛んだ。

そして、頭の中が真っ白になっていく、、、。

何もかもが消えていく。

リセットボタンが押されたかのように、頭の中でも、同時に水が弾け飛んだかのように、何もかもが消えた。

消えてなくなった、。。。

そして、真っ白になった。

俺が誰なのか、俺が何をしでかしてきたのかも、。。全て消えた、。。。

燃え尽きた後に残された灰が、風で空に舞い上がって消えていくように、。。。

ぼんやりと、真っ白な視界が表れてきた。

俺はどれ位眠っていたのだろうか、。。？

1週間か？2週間か？いや半年か、。。？

そもそも此処はどこだろう、。。？

俺はゆっくりと目の玉を動かした。

何もかもが真っ白だった。

俺の平衡感覚が機能しない程に真っ白な空間だった。

少しの間、横になっているのか、何かに持たれているのかさえも理解出来ない程に、床も、壁も、天井も真っ白だった。

天井には明らかにこの空間全体を照らすには十分ではない本数の蛍光灯が、時折ジジッと音を立てて点滅していた。

俺は、冷たくて硬い床の上にうつ伏せの状態で倒れていた。

俺の左の頬はまるで床面に吸いついているかのように動かせなかった。

まるで誰か別人の体のように重たかった。

ゆっくりと上半身を起こしてみたが、体中に激しい痛みが走り、またその場に倒れ込んだ。

肉の塊が白い箱の中に無造作に放り込まれているような、そんな感覚だった。

横たわって、白い壁と床を見つめながら体の痛みが過ぎ去ってくれるのをじっと待っていた。

その内に何だか、なんとも言えない悲しい気分になっていった。この激しい痛みで悲しい気分なのだろうか、、、？

俺は、、、悲しい夢でも見ていたのだろうか、、、？

夢の内容は、、、？

思い出せない、、、というより、なにもかも思い出せなかった、。

何かとんでもない事が起こったような、、、いや、、、もともと何も起こっていないのか、、、？

ただ単に俺は昔からこの空間で寝そべっていただけなのか、、、？

あれ、、、俺は誰だ、、、？

考えれば考える程に頭が錯乱して、目の前に見えている白い壁や床が歪んでくる。

そして、また意識が薄れていった、、、。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8918t/>

カギアナ

2011年10月9日07時46分発行